



あの子に会える噂の
マッサージ屋さん

Vol.2

大好きだったあの子に会えちゃう
秘密のマッサージ屋さんによろこそ！

新社会人として十分とは言えないまでも、スタートを切ることができた今日この頃。

職場の先輩から勧められたとあるマツサージ屋。

取引先から紹介されたというそのお店は、

「自分の好きなキャラクターに会える」というものだった。

なんとも胡散臭い話だとは思いつつ、

そのお店の話を取引先とするようになってから、

仕事が順調になったとのこと……

正直に言えば、
自分もそういうお店には行っている。

いまさら嫌悪するわけでもないのだが、

やはり新しいお店というか、

初めての場所というのは警戒してしまう。

自分が新卒者であることも警戒を高める理由であろうか……
何事にも構えてしまうのだ。

しかし自分自身も今後は取引先とかかわることになる。
その場において、話のタネを用意しておくことに越したことはない。

先輩はそれで上手くいった。
もしかしたら、からかわれているだけかもしれないが……

だがしかし、

そのお店は完全な会員制。

自分の紹介した会員の評価はおのずと先輩にも関わることになる。
下手な人間を紹介することはないはずだ……

これは自分に対する、先輩からの期待なのか？

そんな「下手の考え休むに似たり」をブツブツと呟いているうち、
今日の終業時間を迎えた……

帰り際には先輩からの無言の目配せ……

「……行って来いってことか？」

何事も勉強！

食わず嫌いは良くないと自分に言い聞かせ、
勢いよく上着を羽織る。

そのままの勢いに任せて、
お店の方へと足を運ぶのだった……

先輩からもらった地図を頼りに、わき目もふらずに歩いてきた。
その場所はまったくもって普通の住宅街の中。

「先輩も最初は驚いたって言ってたけど……」

本当にこの場所で合っているのかと心配になった。
まさしく先輩と同じ心境だ。

看板らしきものも一切ない。
お店の場所を知らせる案内も見当たらない……
まさしく「知る人ぞ知る」ということなのか。

会員制であればそのようなものは一切必要ないだろう。
しかしそのあまりの思い切りの良さに、
ただただ驚かされていた。

191



「実際に来てみないと、雰囲気そのものって分からないよな……」
などといっちょ前に感心してしまった。
まだ入り口に立っただけだというのに……

少しばかり迷ってしまったが、
無事に指定された部屋の前までやってこれた。

このような機会でもなければ、
一生立ち入ることもなかったであろう部屋の前。

チャイムを押すだけでよいはずなのに、
少しばかり躊躇してしまう……

部屋の中の様子を知りたくて、ドアに耳を当ててみたり、
周りに誰もいないかと伺ってみたり……
ただただ不審な動きをしてしまっていた。

191



「…我ながら情けない…」
ガツクリ肩を落としてしまった自分にさらに情けなさを感じる。

実際には一、二分程度であったはずだが、
躊躇している時間はなんとも長く感じられた。

「先輩に認められるためにも！」

そして何より自分の将来のためだ！」

などと訳の分からないことを決意し、
ついにチャイムに手を伸ばした。

「ピンポーン」

191



案外大きく廊下に響いた音に少々驚かされる。

「……」

「……おや？」

応答がない。

「へっ、部屋を間違えたか」

一瞬で頭の中が混乱してくる。

確かに予約時に伝えられた部屋の番号。

躊躇している間にも何回も確認したその番号。

間違っではない。

191



「もう、もう一回……」

恐る恐る二回目を試す。

「ピンポン」

再び廊下に響く電子的な音。

ドタドタドタ…

「はっ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！」

191



なんとも慌ただしく、騒がしい感じの音が返ってきた。
一体何事かと、インターフォンに釘付けになった。

「あっ！あの…予約したもののなんですか…
大丈夫ですか？」

まだ顔も見えていない女性だが、
そのあまりの状況に心底心配してしまっていた。

「はっ、はいっ！大丈夫ですよ！」

「ごめんなさい！ちよつと準備に手間取っちゃって！」

予約とは何だったのかと、
そんな考えが一瞬頭をよぎったものの、
とりあえずその場は取り繕うことにした。

191

「あの、中に入って大丈夫ですか？」

「はいっ！もちろんです！
中どうぞ！」

少し落ち着きを取り戻したかのような声。
綺麗な響きが耳に心地よい気がした。

「失礼しまーす……」

重厚な扉を開くと、そこはいたって普通のマンションの一室。

ここがマツサージ屋であるという知識がなければ、ただただ一般人の住む部屋に迷い込んだと思うだろう。

「……ヘルスみたいなお店とは大違いだな……」

そこにはまだお相手の姿はなかった。

ヘルスのようなお店であれば、扉の先やカーテンの向こう側に女性が立っていて、お出迎えしてくれるのが普通だ。

何やら奥からは慌ただしい雰囲気漂う。

さすがに気になり声をかけてみた。

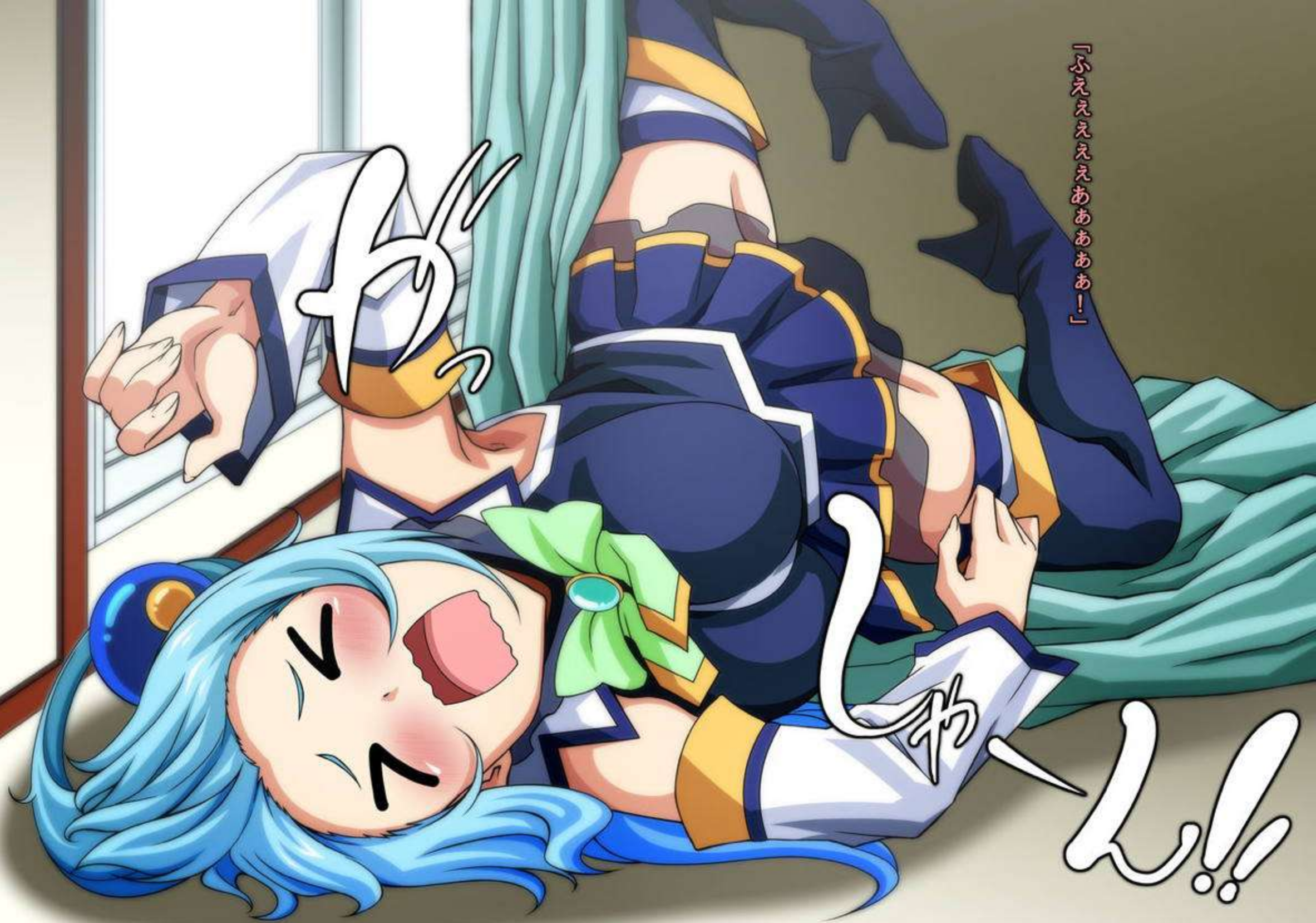
「…すいませーん…
いらっしやいますかー？」

その声に反応したのか、
慌ただしい雰囲気はこちらに向かってきた。

「はーん、うん、あーん、
はい、おはようございますー」

「ああ…はい、慌てず…」

「ふえええええあああああ！」



「だっ！大丈夫ですかあ」

「あっ！……ふああああ」

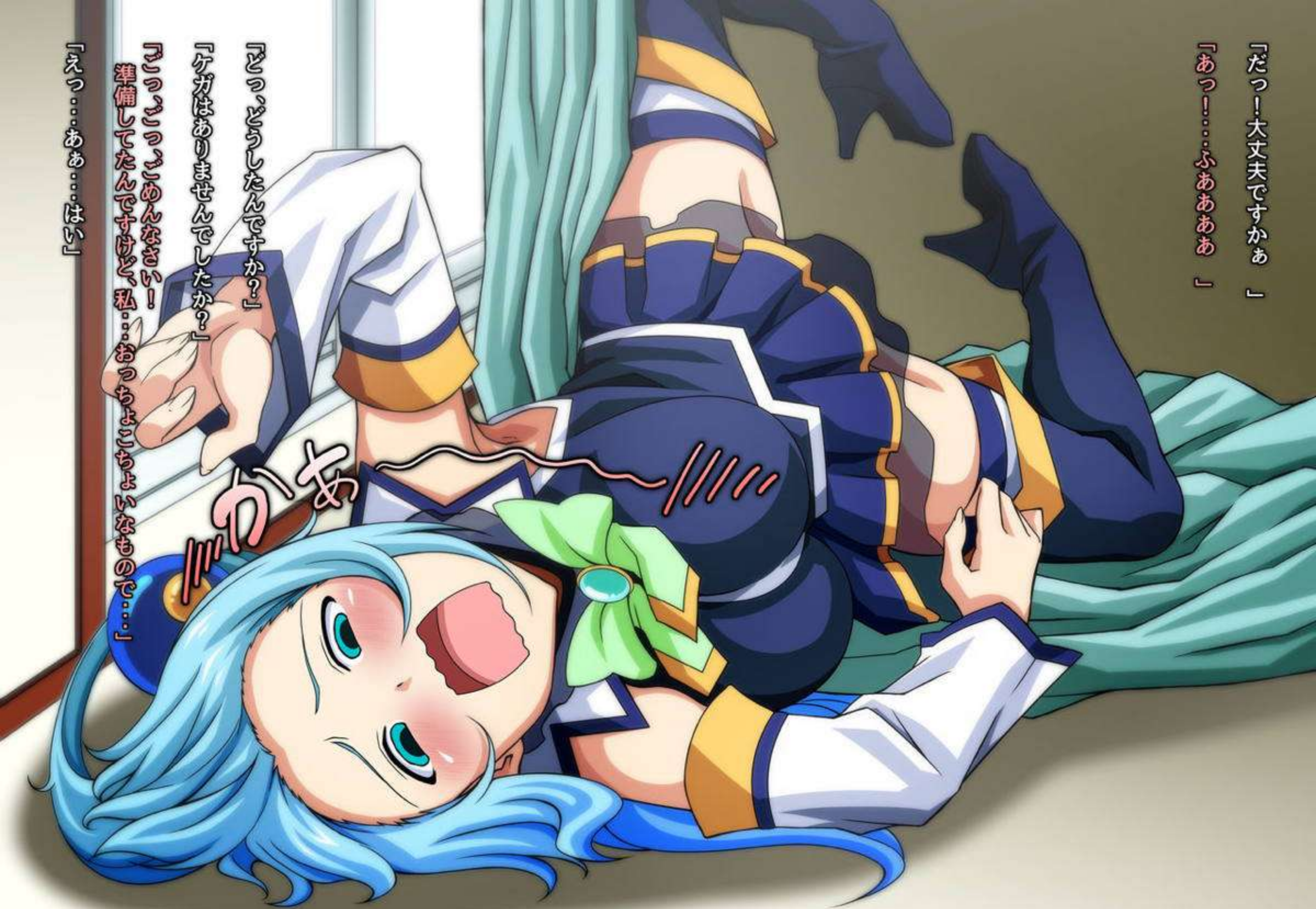
「どっ、どうしたんですか？」

「ケガはありませんでしたか？」

「……っ！……っ！めんなさい！」

「……ののの……なまも……ん……ら……ん……ら……ん……私……お……つ……な……い……す……よ……ら……ん……な……ま……も……ん……ら……ん……」

「えっ……ああ……はい」



「お出迎えもまだだったし、
急いで出なきゃって思ったら足が…」

「ごめんなさい!」

「ああ…いえいえ、大丈夫ですから」

「あっ…」

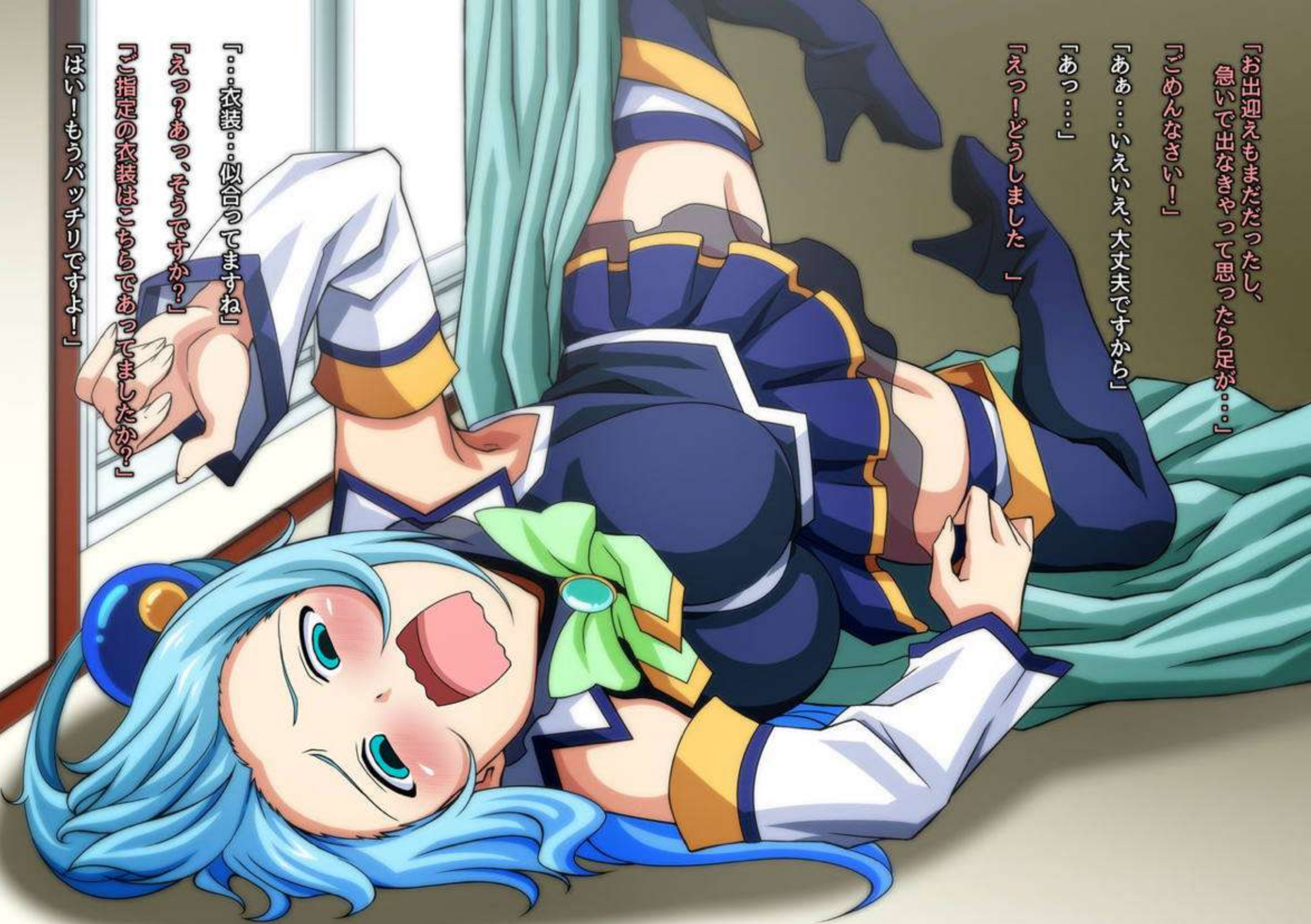
「えっ!どうしました」

「…衣装…似合ってますね」

「えっ…あっ、そうですか?」

「指定の衣装は「こちら」であってましたか?」

「はい…もうバッチリですよ!」



「せっかく衣装も指定してくださったのに……
ごめんなさい、こんなお出迎えになっちゃって……」

「ああ、いえいえ……むしろイメージ通りというか……
それっぽいというか……」

「えっ？ それってどうい……」

「ああー何でもありませんよー」

「どうですか……っ」

「でっ、では……さっさとすませよ」

「こちらの……いま私の背中の方にある部屋が
シャワールームになっておりますー」

「まずはこちらにて汗をお流しになってくださー」



「中にあるアメニティーなども自由にお使いください！」

「わかりました」

「いゆっくりとどうぞー！」



「いたたた…」

「指定したキャラクターはあの子だったし、まさしくイメージ通りって感じだな」

「…だけど、まさかあそこまでイメージ通りとは…」

「あんなにエロい子が近くにいる、なおかつ隣で寝てたりするのに、どうして手を出さないのか疑問だったけど、実際毎日あんな感じだったりしたら手を出す気にもならないのかな…」



「…っ、っ」

何を真面目に考えているんだ、俺…」

「あの子はあんなにエロいお兄さんのマッサージュ師さん、あの子そのものでじゃなら…」

「…馬鹿野郎、
何を期待してんだ俺は！」

「だげ…生殺しもららんと…
「はあ…」



「…だけど、」

「いざ目の前に来られたら…嬉しいよな」

「俺の大好きなキャラクターだし…」

「この店を紹介してくれた先輩には感謝しないと」



「がちゃん！」

「…ん？」

「お湯加減、大丈夫ですか？」

「えっ！ あっ、はい！大丈夫です！」

「あっ！」めんなさい！

驚かせてしまいましたか？」



「ええ、あっいえ！」

「まさか入ってこられるとは思ってもしなくて！」

「えへへ、よろしければお背中を流してあげようかと…」

「えっ！ いいんですか！」

「はっ！」

「他の子はやってないみたいなんですけど、
マッサージ前にお話しした方が、よりリラクゼーションできるかなって」

「あっ！じゃあ タオルを巻きますから、
ちょっと待っていてもらえますか？」

「えっ？」

「タオルなんか巻いたら体を洗えませんよ？」

「でも…今裸ですから…」

「ああ、そんなお気になさらずに！」

「えっ！ あっ！ ちょっと！」



「失礼しまーす！」

「うわわっー！」

「どうぞリラックスしてくださいねえー！」

「べっ、どうも…ありがとうございます…」

「えへへ、お背中洗いますねー！」

「ごめん…こんなことしてくれるとは思ってもないくて！」

「結構、これ評判いいんですよ！」

「お店からはある程度自由にしていいって言われてて、これは私からのサービスです！」

「ぞっ、そうなんだ！」

「てっきりシャワーは一人で済ませるもんだとはかり…」

「普通はそうですよね！」

「だけど、せっかくの水の女神様！
シャワーからサービスしなきゃ！」



「あっ、そうらうとくも赤ちゃんど…」

「もちろんです！」

「指定頂いたんですから、
衣装だけでなく、ちゃんと本人になりきらないと！」

「…本人のようにね…なんだか納得…」

「あっ！さっきの」と思い出しましたね！」

「あれは本当にうっかりで…」

「うんうん分かってるよ、
女神様ともあるう方が、うっかりこけたりなんかしないよね！」

「あああ！ なんだか馬鹿にされてる気が！」

「あはははー！」



「あああ……でも気持ちいいよ！
背中を流してもらうなんて何時以来だろう」

「今は一人暮らしですか？」

「そうだね、実家は大学の時に出てきたから」

「一人暮らしだと、ゆっくりお風呂に入るなんてことも
やらなくなりますがからね……」

「そうだね……何かと時間に追われるからね」

「今日はゆっくりしてゆっくりしてくださいね！
いっぱいサービスしちゃいますから！」

「サービス？
それってどんな？」



「えへへ、それは嬉しい嬉しい♪」

「私に会えたかったんでしょ？」
「とんりラックスして、口えごんねてらるすよー」

「そんな」と言われると…期待せずだよ…」

「…ん？」

「どうかしましたか？」

「えっ…ありがとう…」

「何かを期待してるとは…」

「…ん？」



「はい、ではどりあえすシャワーは「のへららららら」ですかねー!」

「えっ! あっ、うん…!」

「体も綺麗になりましたし!」

しっかりとマッサージしてデトックス!
内側も綺麗にしましょうね!」

「そっ、そっですかねー!」

「お体を拭きましたら、

棚にあります紙パンツを穿いてくださー!」

「では私は「こ」で失礼しますね!」

「ほっ、ほっ! わかりましたー!」

「慌てず、お越しになってくださー!」



「シャワーお疲れさまでした!」

「さっそくですが、マッサージの方始めていきますね!」

「お願いします」

「はい!」

「どこか触ってほしくない場所とかあったら
遠慮せずに言ってくださいね!」

「力加減とか、いかがですか?」

「大丈夫ですよ!
むしろもっと強くてもいいかな……」

「あっ!わかりました!
もう少し強めですね!」

「あっ、そうそう、
今ぐらいが丁度いいね!」

「はい!」



「お兄さんは……あつ、なんてお呼びすればいいですかね？」

「うん？お兄さんでいいけど……気になる？」

「あつ！いえいえ！」

お客様なのにお兄さん呼びは失礼かなって……
気になっちゃいます……」

「そんな気を使ってくれなくていいよ」
今日ここにはリラックスするために来たんだから、
楽しく、打ち解けてお話ししましょうよ」
「そう言っていただけだと嬉しいですよ！」

「では……お兄さん」

「うん、なんですか！」

「えへへ……」

お兄さんは誰からのご紹介でこちらへ？」

「会社の先輩からだね」

何かと俺のことを気にかけてくれて、
なんでも取引先の人がこのお店の常連だとか……」

「話の種として知っておくべきだぞってね」
「なるほどです」

「お兄さんもこのお店が気に入ったのなら、
是非新しい会員様をお連れくださいね♪」
「営業に関しては流石というところだね！」

「あっ！でもお兄さんが来店の際には、
必ず私を指名してくださいね！」

「あはは！抜け目ないね！」

「そういうつもりなら、
今日はしっかりサービスしてもらわないと！」

「はい！しっかりと奉仕させていただきます！」



「ご奉仕…か…」

「うん？どうされました？」

「あっ！いや…なんとも耳に心地いい言葉だなんて…」

「お客様の要望にお応えするのが私の役目！
何なりと仰ってください！」

「うん…」

「あっ！今何か考えましたね！」

「えっ あっ、いやそんな…！」

「誤魔化せないですよ…えへへ」

「今私がどんな体制でマッサージしてると思ってるんですかあ〜？」

「どんなんて…」



「あっ！お尻が…その…乗っかって…」

「もう…」

「さつきからお尻に何か固いものが当たってるんですよねえ…」

「マッサージに使う棒か何かがお尻の下に入っちゃったのかな？」

「あっ、あの…ごめんなさい！」

「シャワーの時から、抑えがきかなくて…」

「あはは」

「まっ！でも…女神さまのマッサージを受ければ、

誰でもそうなっちゃいますよねえ」

「お兄さまが健康な証拠ですよ！」

「いめんね…でも…そう言ったら、どらてはくれならの…」

「ええ？何でどく必要があるんですか？」

「私はマッサージをしているだけですよ？」



「えっ！あぁいや……それはそうなんだけど……」

「ほら！足のマッサージをしますからね！」

「グイッ！グイッ！」

「あっあっ！」

そんなにお尻を前後されたら……擦れて……！」

「はいっ！力を入れるためにも……！」

体全体を使ってマッサージしていきますよー！」

「はいっ！はいっ！」

「えっ！あっ！」

「待って待って！そんなに擦られたら……！」



「血行がだいぶ良くなってきたみたいですね!」

「体中熱くなってきませんか?

マッサージをして、血行が良くなっているサインですよ♪」

「う、うん……おかげさまで……だいぶ……」

「このままの体制でもいいんですけど……」

もっと念入りにマッサージさせていただきたいので……」

「足を開いて、内ももあたりをほぐしていきましよう!」

「あっ、はい……お願いします……」

「はいっ!」

ではちょっとわたくし、退かせていただきますね♪」

「お兄さまはゆっくりでいいですよ!」

急に動いたりすると、腰に負担がかかりますから!」

「ゆっくりと体制を変えてください♪」

「(マッサージは本当に気持ちいいけど...)」

「(本当にこのまま、マッサージだけで終わるのか?...)」

「(もしそうだとしたら生殺しだな...)」

「お兄さま?
いかがなされましたか?」

「えっ」

「あっ、いやー何でもないよー何でも...」

「そうですか?」



「はいそれでは足を開いて、リラックスしてくださいね!」

「はいはい、こんな感じでいいかな?」

「はい!」

「それでは足の付け根から、順番にほぐしていきますね!」

「ああ…内ももあたりがだいぶ凝ってますね…」

「気合入れてほぐさせていただきます!」

「営業で歩き回ってるからねえ…」

「自分でストレッチとかもしてるんだけど、なかなかね…」

「歩き通しや立ち仕事の人は大変ですよね…」

「まかせてください!」

「私がしっかりとほぐして差し上げます!」

「大丈夫と分かったとたん、
もっともっとなつておねだりですか？」

「遠慮がないですねえ〜」

「きっ、気持ちよくて…最高で…」

「えへへ

「そうなら嬉しいです〜!」

フク
ニク♡

「遠慮なんてしなくていいですからね〜」

「リラククス♪リラククス♪」

「お兄さんの大きな大きなこりを

マッサージ〜♪」

「お兄さんの熱い熱いこりを

マッサージ〜♪」

「うめあああ……もっ、もっ、もっ、もっ、もっ、もっ……」

「えっ？何ですか？」

「もっ、もっ、もっ、もっ、もっ……」

「出るって何がですかあ……？」

「その……それだけやられれば、
そろそろ……」

「ああ……なるほど、
こりをほぐしてたんですもんね！
そろそろ温まってきたということですかあ……？」

「いや……そうじゃなくて……」

「この部分のマッサージはもういらですかねえ……
もうやめちゃうかなあ……」

==/2!!

==/2!!



「あっ…待って待って…
もう少し…もう少しで…」

「ええ…もう十分にマッサージしたのだよ…」

「あと少し… あともう少しで…」

「もう少し…」

「…もう少し…」

「あ…あ…あ…」

「…あ…あ…」

「ええ…」

「クッ!」
「クッ!!」





「うおおおおおおおおおおおおー」

「あらあらあら……」

「はあはあはあ……」

「マッサージをしてただけなのに……まさか射精をしちゃうなんて思いませんでしたよお……」

「えっ」

「だって今僕の求める癒しをしてくれるって……」

ア
♡

「そうは言いましたけどお……エッチな意味でなんて言ってますし……」「いっとういっとうとされると困るんですよえ……」

「えっ えっ はっ」

「そっ、それは冗談……だよね……?」

「うんっ？」

「困るってのは本当ですよお……」

「……はっ」



「私がさらにエッチなことをしたくなつちやうって意味で……
困っちゃいますねえ……」

「……」

「こんなに大きくて、固くて……
それでいてこんな力強い射精ができる……」

「もっとエッチなことをしたら……気持ちいいんだらうなって……」

「……女神さま、もっとエッチなことを求めてもらいますか」

「……それがお望みなんですか？」

「女神さまももっと気持ちいいことしたいです！」

「させてくださいー！」

「お望みのことをして差し上げるのが私の役目……
だけど……これ以上のことは怒られちゃうかもしれませんよ？」

「女神さま……ここまでできたなら僕もはぐらかしたりしません！
女神さまと気持ちよくなりたいですー！」

「えっ！ あっ」

「(内ももをマッサージするからしようがないとはいえ……)」

「(股間に顔が近いなあ……鼻息が……)」

「まふしゅーまふしゅー」

「あっ、あのぉ……」

「はいっ！
どういたしました？」

「一生懸命やってくれてるところ悪いんだけど……」

「はいー」

「ちょっと股間に……その……」

「？」

「あっ！もしかして紙パンツがズレちゃいましたか？」



「そっ、そうじゃなくて……」

「それでしたらちょっと直して差し上げます!」

「ちょっと失礼しますね!」

「あっ!いや!そうじゃなくて!」

「あっ!」



「……あ」

「あつーいやこれはー」

「……」

「いめんねーすぐに戻す……」

「気づけなくて申し訳ありません……」

「えっ」

「私の役目はお客様をリラックスさせ、お疲れをとる……」

「……はら」

「それなのにこんなに大きな（こり）を見る……」

「えっーあつーいや……これは……」



「お任せください！
私がしっかりと（こり）を取って差し上げます！」

「わっ！わっ！わっ！
ちよっと何をして！」

「何って、マッサージですよ？
大きな大きなこりを取って差し上げます！」

「あの…出しちゃったことは謝るから！
だから…そんなことは…その…」

「マッサージ屋さんに来て、
マッサージを断るなんて…」

「そんなお客様はいらっしゃいませんよ？」

「さっ！どうぞリラックスして、
私に体をあずけてくださいまし！」

「えっ…ほっ、本当に…っ？」

「はー！」

「んっ♡
んっ♡
んっ♡

「（本気なのか……からかわれてるのか……？）」

「あははー！」

「えっ なっ、何？」

「急なことでまだ頭が追いついていないって感じですねっ」

「あっ、はい……」

「このお店は会いたい子に会えるマッサージ屋さん！
憧れの子に会って、マッサージしてもらえて、
そして日々の疲れを癒せる場所」

「お兄さんの求める癒しを、わくしが シテ 差し上げる」

「ですから……何なりとお申し付け下さればいいんですよー！」



「僕の求める癒しを……？」

「はいっ」

「お兄さんの求める癒しは何ですか？」

「……女神さまと……」

「はっ」

「女神さまと一緒に気持ちよくなりたい！
気持ちよくしてあげたいです！」

「えへへ」

「何だかまだ抽象的な言い回しですね♪」

「でも！わかりましたよ！」

「一緒に気持ちよくなりたいんですね！」

「そっ、そうですー！」



「わかりました!」

「ではまず、今私の手の中で熱く、固くなっているこれを……
気持ちよくく、気持ちよくくして差し上げますね!」

「おっ、お願いします!」

「はっ!」

「強かったりしないですか?
痛いようだったら言うってくださいね!」

「痛いどころか……もっと強くしてください!」

「えへへ」

「流石に元気ですね」

「ならもっと早くしていただきますね!」

「うめああ……らららです……もっと!」

「だて」
♡

「う」
♡

「えへへ…押し倒されちゃいました…」

「その…ごめん…
なんだか我慢できなくなつて…」

「あれえっ…ごまかしてやっつけておられて怖気づらちゃいましたか？
女神さまを押し倒しておられて…」

「えっと…」

ド
キ

「せっかく私もその気になつたのに…
お兄さんが嫌ならしようがないかなあ…」

「ああ！待って待って！
したいです！
女神さまと一緒に気持ちよくなりたいんです！」

「えへへ…
正直に言えたじゃないですか？」

「正直者には女神さま、ご褒美をあげないといけませんね？」

「おっ、お願いします！」

「…もっ…そろそろ…」

「えっ…あつ…！」

「中に出すのは…さすがに…」

「嫌っ！」

「えっ」

「外なんて出さないでええええ！」

「中に…！」

「そっ…そんな…」

「それはさすがに…」

「大丈夫だから！」

「大丈夫だから中にいいいいいい！」





「あっあああああああああああああああああああ!」

セウ

セウ

びびびび

びびびび

「……うっ……はぁ……はぁ……」

『おなかの中……熱い……熱い……』

『溢れちゃい……ましたね……』

『はっーはっーはっー!』

「だっ、大丈夫でしたか」

『はいっ……ちよつと……
気持ちよすぎて……身体が熱くなりすぎちゃって……』

「遠慮なしに出しちゃいました……」

「えへ……えへへ……」

「これは誤魔化しようがないほどだ……出されちゃいました……ね」

「女神さまを種付けしたんですよ……
気持ち……よかったですかあ……」

ぽ
ぽ

「もう最高で……今までで一番気持ちよかった……かも」

「えへへ……お世辞でも嬉しいです！」

「いや！お世辞なんかじゃなくて！」

「えへ！
必死になっちゃうところとか……可愛いです！」

「ハァ♡」

「ハァ♡」

「そんなことは……お店でセックスしちゃうような
ひどい客だよ……僕は……」

「あれ？
また怖気づきましたか？
……ここまでしちゃってるのだから……」

「うっ……それは……
賢者タイムというか……その……」

「もう……そんなガツクリしないでください……」

「しょうがないなあ……
若いんですから、まだまだお元気ですよね？」

「えっ……？」

「体力だってまだまだたっぷりあるはずですよ！」

「お兄さんが満足しても、私がまだ満足してません！」

「それは……」

「今晚のご予約はお兄さん一人、
まだまだお相手できますよ！」

「ほっ……本当に」

「うっ……まずは……そうだなあ……」

「次の（マッサージ）に移る前のお掃除が必要ですよね！」

「……掃除？」





「はいっ」

「お掃除♪
お掃除ですよおっ」

「だけど、このことは絶対に内緒ですからね♪」

「はっ、はい！もちろん！」

「お兄さんが正直に、私と気持ちよくなりたいたいと告白してくれた……それで私も気持ちが高ぶって……いいですね♪」

「誰にも言いません！」

今後紹介する人たちにも、絶対に！」

「自分も」褒美がほしいなら、自分自身から行動！
お兄さんはちゃんとそれができましたね♪」

「はい！女神さまに会えるよう、
お仕事頑張ってるし、勇気を出してお店にも来ました！」

「えへへ♪」

……だけとお兄さんが好いてるのは、
あくまで女神さまを……なんですよね……」

「……ちよつと残念……かな」

「えっ？」

「それってどういっ……」

「いえー何でもありませんよ！

「それよりもほらっ！このまま何もしないんですか？」

「あっーいやー！

「女神さま！私と一緒に気持ちよくなりましょうー！」

「うん♪ ゆっくり……最初はゆっくり……ね？」

「はい！女神さまの中に……俺のを！」

「ああ……！挿って……きちやう……

「私の中に……大きいのが……！」





「ぐわんぐわんぐわんぐわん」

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

「あああ……はっ……！」

「はっ……挿りました……よ！
女神……さまー！」

「はっーはっーはああ……！」

「ギッチギチ……だっ……！」

「お兄さんの……大きすぎい……！」

「一番奥まで……届いてるう……！」

「うああ……最高だっ！
女神さまの中……最高ですー！」

「ああああ……そんなハッキリ言われたら……
なんだか恥ずかしく……なっちゃうー！」

「うああーよりー層きつく……なってー！」



「女神さまは声に出して説明されたりすると……あそこがきつくなる体質なのかな？」

「いやあ……そんなハッキリと言わねえんだからー」

「ほらー！今もあそこがギュツツーギュツツーっどー」

「そんな……」

「この状態で突いたら……どうなっちゃうのかなあ？」

「えっ！はあああ！」

「そりゃー！そりゃー！」

「あっーひああああー！
ゆっくりとー最初はゆっくりとおおおー！」



「あああああーキツイー！
女神さまのま○こー！
最高にキツイー！」

「あつーあつーあつー！
ひあああああああああああー！」

「突かれるたびに……！
身体が……！」

「感じてー僕ので感じてーくださいー女神さまー！」

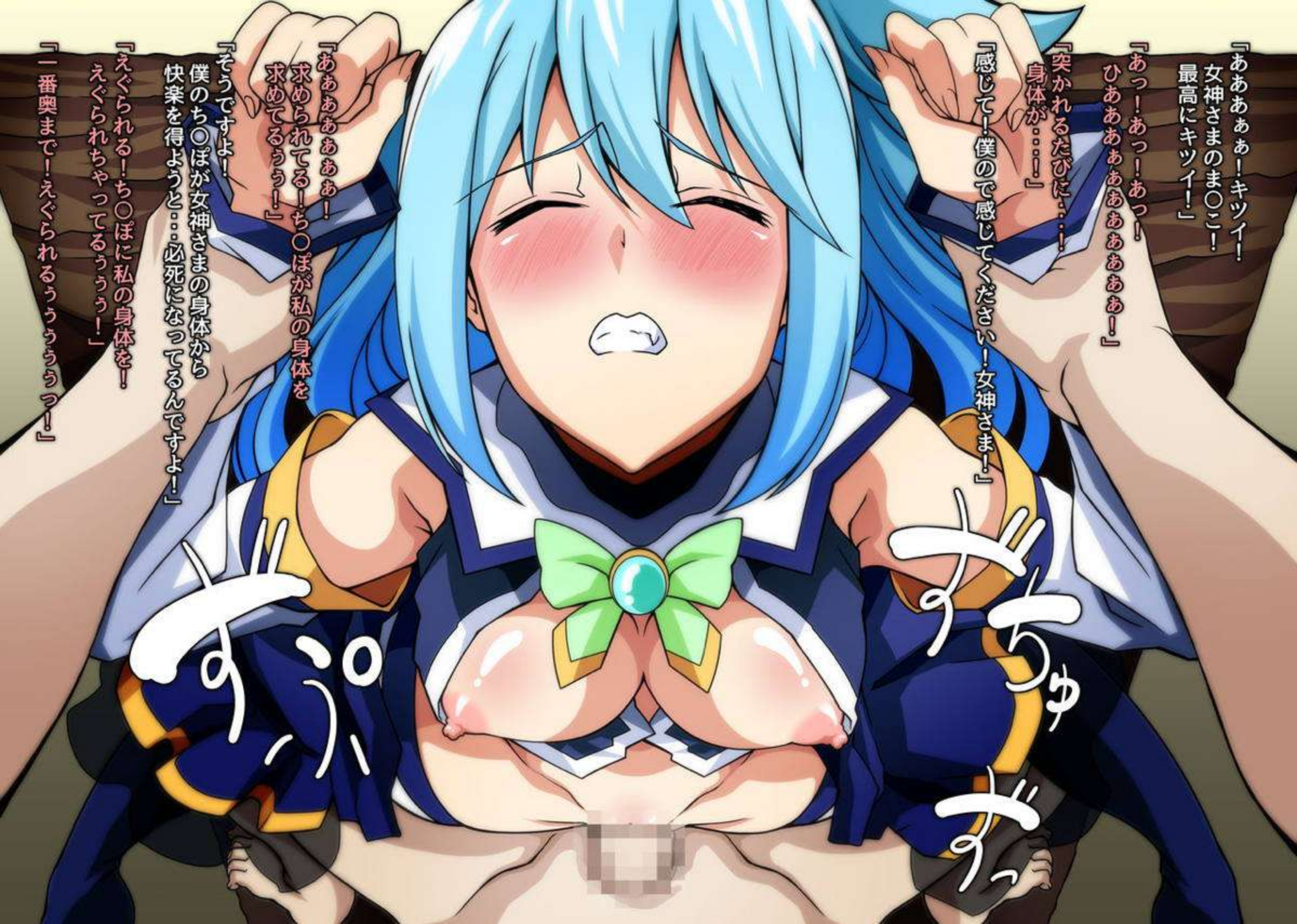
「あああああああー！
求められてるーち○ぽが私の身体を
求めてるううー！」

「そうですよー！」

「僕のち○ぽが女神さまの身体から
快楽を得ようと……必死になってるんですよー！」

「えぐられるーち○ぽに私の身体を！
えぐられちゃってるうううー！」

「一番奥までーえぐられるうううううー！」



「このお店に来たかいたがあったあ！
こんな最高のお店！
何で今まで僕は知らずにいたんだらう！」

「お兄さんが来てくれて！
わっ…私…！
嬉しいです！嬉しい！」

「はははっ！」

「いいですか？
僕どのプレイ！そんなに…！
いいんですかあ！」

「うん！すごいっ！
ぶっといち〇ほすいっ！
身体の奥の奥まで買かれるうううう！」

「ぶっといち〇ほセックス！
一番奥までのぶっといち〇ほセックス！」



「ああ……！」

「言っちゃった！セックスって言っちゃったあああ！」

「女神さま……」

「女神さまはプレイ中は気持ちが高まっちゃうんですか……ね！」

「そんなはしたない言葉を叫んじゃうなんて！」

「はいっ！ごめん……なさい！」

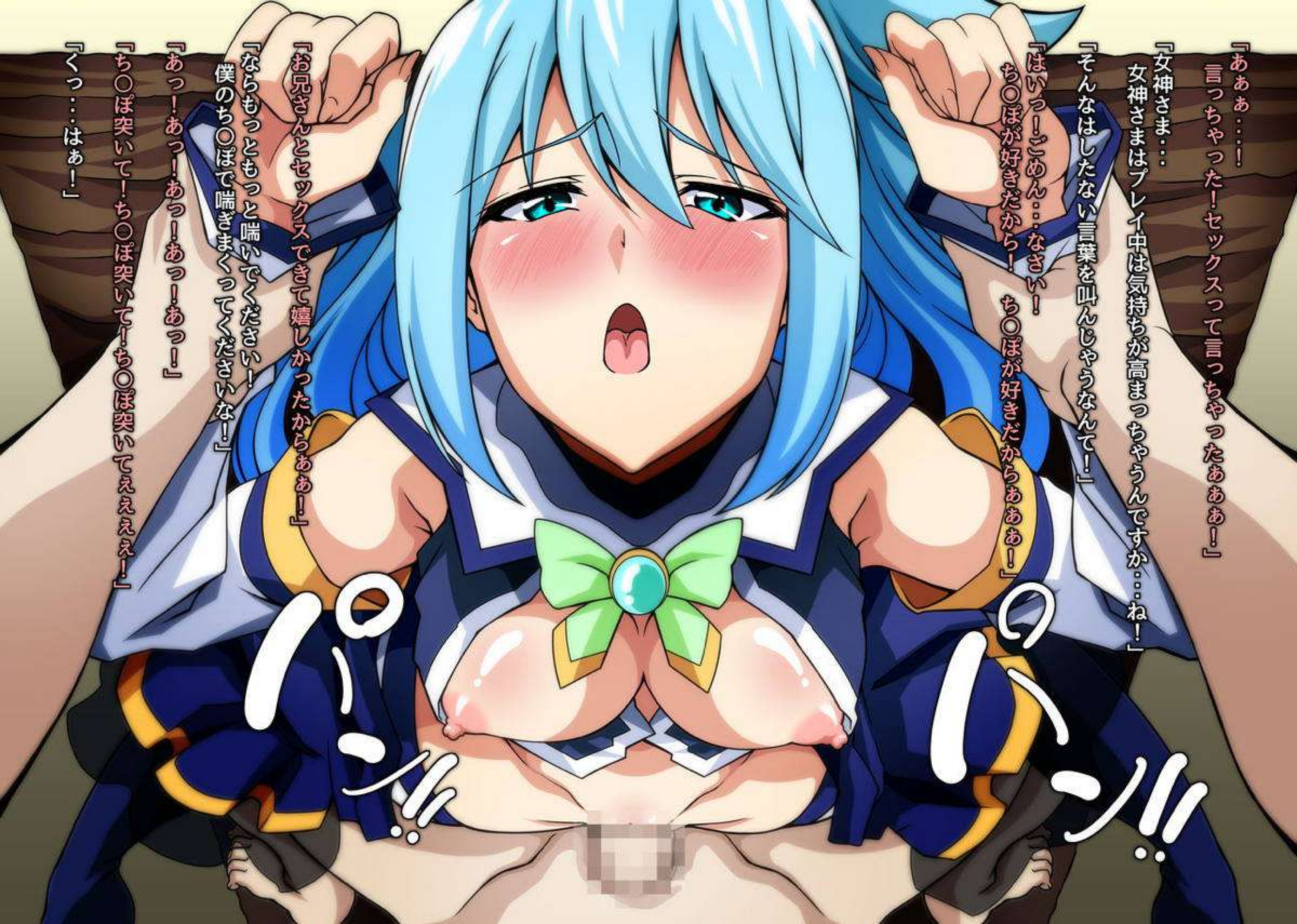
「ち○ぽが好きだから！ち○ぽが好きだからあああ！」

「お兄さんとセックスできて嬉しかったからああ！」
「ならもっともっと喘いでください！」
「僕のち○ぽで喘ぎまくってくださいな！」

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いてええええ！」

「くっ……はぁー！」



「そちらにお立ちください」

「いっ、いっ、これでいいのかわ？」

「はい！」

どうぞリラックスしててくださいね」

「鼻息が当たるほど近いね……」

「くすぐりたいですか？」

ビク

ビク

「さっき出したばかりだからね……」

あの……まだ洗ってないけど……」

「そんなの気にしません！」

ああ……こんな大きいのが私の中に……」

「立派ですね……目の前だと特に……」

「このまま出しますからね！
女神の口に……！！
出しますからね！」

「んんんんっ！
んん！」

「んんんんっ！
んんんんっ！」

「んんんんんっ！」

「あゆほ」

「あゆほ」

「あゆほ」



「んんんうあああああつ！」

あゝ

るるる！！

「んへえあああああ……」

「げはっ……おええ……」

「あぐう……はあ……はあ……はあ……はあ……」

「うえええ……はあ……」

ごぼ♡

「だっ……大丈夫だった？」

「うええ……はっ……はい……」

「だい……大丈夫です……おえ……」

「気持ちよすぎて……女神さまのお口……最高です……」

「よっ…喜んでもらえて…
よかった…です…」

「好き勝手に腰をふっちやって…」

「ふう…ふう…」

大丈夫です！なんだか頭がクラクラしちやいました…」

「今私、犯されてるって！」

好き勝手に使われちゃってるって…
それが余計に興奮して…」



「今までやったことない…」と…

経験させてもらえて…

来たかいがあったよ…！」

「えへへ…そう言ってもらえるなら
頑張った甲斐がありました！」

「…でも」



「どうしました?」

「これじゃお掃除の意味がないね」

「えへへ。。。そうかもかもしれませんね♪」

7~♡

7~♡

「女神さまに可愛がってもらったから
いつも以上に……かな」

「本当ですか？
それなら嬉しいです！」

「この後のマッサージを楽しんでいただくためにも
これからお掃除させていただきますね♪」

「うっ、うん……お願いします」

「えへへ……どうぞかませだ
リラククスしててくださーらー」

「それじゃ……失礼します」

「んんむあ……」

「あっ！熱っ……！」

「んん……大きい……むぐう……」

「お兄さんのが脈打ってるのが……舌に伝わってきます……！」

「女神さまのお口の中……」

熱くて……ぬるぬるで……」

「んんむぐう……しっかりとお掃除させていただきます……！」

ぽっ♡



「ああ……気持ちいい……最高だ！」

「大きいから……んん……全部お掃除できるかな……」

「んん……むぐう……うむう……」

「女神さまのお口、最高！」

「そうやって必死に啜えてくれてる姿
それだけで最高に興奮するよー!」

「むぐっ……ありがとうございます!」

私は女神ですが、今はお兄さんに「奉仕するのが役目……」

「うへあ……遠慮なさらず

私のお口を堪能なさって……ください……」

「言われなくても……ああ……

すっかり楽しませてもらってるよー!」

「むぐっ、むぐっ……嬉しいですー!」

「その小さなお口いっぱい俺のイチモツが
啜えられてるんだね」

「はい……むぐっ……」

私のお口の中、ち○ぽでいっぱいなんです……」

「女神さまの身体を……全部俺ので満たしてみたいな……」

「うへあ……全部とは??」

「今もすでに……ち○ぽ……」

ちゅぽ。

ちゅぽ。

「もっと奥まで啜えられるかな？」

「もっと、もっと……奥……ですか？」

「そう！もっと奥がいいなっ！」

「むぐっ！」

はっ、挿いる……かな……」

「女神さまの奥の奥まで行ってみたい！」

「はっ、はい……」

「チャレンジ……っしてみます……」

「ありがとう女神さま！」

それじゃ……お邪魔して……」



「ぽんぽん」

ぽん

せーの

ぽん

「ああああ…」

女神さまの口ま〇ん！

「んっ！んっ！んっ！んんぶっ！」

「喉奥まで…俺のを…！」

「んっ！んっ！んんぶっ！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「んんっ！ んんんんっ！」

んんぶっ

ちゅる

ちゅる

「ああ……ごめんね！
さすがに苦しかったよね……」

「ああああ……はあ……はあ……
のっ……喉まで犯されちゃいました……」

「大丈夫……ですよ……
ちよつと頭がぼおーつとしちゃって……」

「まだできるかな……？」

フウ♡

「はっ……はい……頑張ります……！」

「なんだか……これ……
犯されてるって感じがして……なんだか……」

「らっ、嫌ならもうしならよー！」

「いえ……やらせてください……
私の喉……喉ま○……犯してくださら……！」



「はっ…はい…
女神さまのすべて…！…犯します…！」

「んんんぶっ！んんんんん！」

「んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！」

あーっ
あーっ

「女神の喉ま〇っ…！」

今は俺専用の喉ま〇っ…！」

「んんぶっ！んんぶっ！んんぶっ！
んんうおおおっ…！」

「狭い喉のところが引つかかって！
俺の…ち〇ほ…擦られる…！」

「さて…お兄さん？」

「えっ…あつはい…」

「なんでしょうか…女神さま…」

「おまほごは随分と好きにしてへんだからましたおっ」

「いっいめんな…おっ」



「えへへ♪」

「別に怒ってるわけじゃないですよお！」

「ただ、お兄さんが好き勝手したなら、
そのお返しもしなきゃですよね！」

「そっ、そうですね…」

「今度は私が好き勝手する番！
私に主導権！です！」

「お兄さん……大丈夫ですかあ……？」

「はあ……はあ……うん、大丈夫だよお〜」

「女神さまの腰ふり……この世のものじゃないみたいで……」

「私も……まで気持ちいいのは初めてかも……」



「下からの射精……私のお腹を貫いたみたいで……
お腹の中……ぐるぐる渦巻いてるみたい……」

「熱い……お兄さんの精液が……
私のお腹の中をぐるぐる渦巻いてるうう……」

「こんなに射精したのは……
女神さまとの相性がいいのかな？」

「本当に？
本当にそう言ったださいますか？」

「うっ、うん！
女神さまと俺…最高に相性がいいよー！」

「…女神さまと…ですか？」

「えっ？…あっうん…」

ハァ♡

ハァ♡

「そうですよね！
女神さまに会うためにいらしたんですもんね！」

「…」

「いめんさー！
変な」と聞いちゃいました…」

「あ…もしかして…」



「さあーさあー！
次はどういたしますか？」

「えっ！」

「さつきから射精しつづもまだ元気な
お兄さんのち○ぽ！」

「私のお腹の中ですよと元気なままですよ！」

「攻守交代しますか？」

「うっ……うん！」

「次は……俺の番かな！」

「まかせてよー！
女神さまを満足させて見せるから！」



「この意味ですよーお兄ちゃん」

「（楽しいんだけど…なんだろ）のぞきまは…」



「お掃除もしつかりしたし、私が満足するまでお相手してもらいますからね！」

「…むしろそれは主導権を握られるというよりご褒美に近いような…」

「いつ、いいんですよ！」

「私が満足するかどうかなんですから！」

「そっ、そうですか…」

「お兄さんはどうぞリラックスしてください！私がすべてやってあげます！」

「もし出そうになったら？」

「あっ！ダメですよ！」

「私に主導権なんですから！」

「私がいいって言うまで我慢してください！」

「うへえ…それはキツイなあ…」



「そんなイヤイヤでも、
」はしっかりと元氣じゃないですか！」

「そりゃ、女神さまの裸体を目の前にすれば……」

「嬉しうて言ってくたさいますね、
俄然やる氣になつてきますよ！」

「なんでそんなにノリノリなんだろう……」

「細かい」とはいいんですよ……
そろそろ挿れちゃいますからね！」
「へあ……あつはらーお願いしますー！」
「えへへ、いただきますー！」





「...」

「あつ……はあ……」

「一気に根元までいっちゃいましたよ！」

「はあ……やっぱり女神さまの中……
最高ですっ！」

「気を抜いて出しちゃわないでくださいさね！」

「私が満足するまでですよ！」

ハァ♡
ハァ♡

ひゅ
ひゅ

「きゅ、気を付けます……」

「えへへへ」

意地悪言いましたけど、
お兄さんはリラックスしててくださいね！
変に緊張してたら楽しめませんもんね！

「おっ、おっ」

「あっーはあぁ！
うっくっ…あぁあぁあ…」

「やっぱり…お兄さんの…固くて、大きい！」

「あぁ…さっきとはまた違って…
俺のが…擦られる…！」

「いい…いいですよ！
お兄さんのち○ぽ最高ですううう！」

あ♡

「俺も…最高だ…よっ！
女神さまに腰を振ってもらえるなんて…！」

「はっ、はっ、はあぁあ…
正直者で…私の…おめがねにかなった方だから…」

「えっ？
今なんて…？」

すちゅ

すちゅ

すちゅ

「あっ
いえっ！何でもありませんよ！」

「ほっ、ほらほら！
集中してください！女神のあそび…堪能してください！」

「うっ、うん…はい…」

「あっ！はっ！
うぐ…はあああああ！」

「女神さまに出会えて…俺は本当…
幸せです！」

「次も絶対に女神さまを指名しますよ！」

「本当…ですか！」

「ああああ…嬉しいです！」

「もっともっとお店に来て…私のこと…愛してください！」

「はいっ！」

「俺ももっとな女神さまの」と好きになりそうです！」



「あああ…はあ…」

「あっ！あそこがより一層しまつて…あぐっ！」

「愛してるなんて言葉…言われたら…
はあああああ…」

「女神さま…大好きです！
大好きですよ！」

「女神さま！」

「俺…もうそろそろ…」

「ええ！」

「もうですか」

「私まだイッてないんですよ！」

「もう少し…もう少し頑張ってください！」



「こんな…激しまりのま○じや…
もう我慢なんて!」

「もう少し!あああもう少し!
お兄さんのち○ほでイキたいんですううう!」

「はっ…はい!
もう少しだけ!もう少しだけ我慢!
我慢!」

「がんばって♡
がんばれ♡
がんばれ♡」

「お兄さんのち○ほでイキたい!
お兄さんのち○ほでイキたい!
お兄さんのち○ほでイキたい!」



「それじゃ今度は後ろからいいかな？」

「はい、バックですね！
ちよっと恥ずかしいですけど……」

「俺、この体位が一番好きなんだよね……」

「なんだかエッチしてるって感じがするし……それに……」

「それ……」

「この体位は女の子を征服してるって感があつて……
なんだか興奮するんだよね……」

「女神さまの全部を征服しちゃうつもりなんですわ……
ちよっとだけ怖いですねえ……」

「あああ！そんな本気で……そんなつもりはないんだよ」

「ただなんというか……その……」

「えへへ！冗談ですよ！

人それぞれ好きな」とって違いますからね」



「ひあああああああああああああ！」

「あああああ……ひああああ……
あああぐうう……」

「はあ……はあ……はあ……
これで……4?……5回目?……かな……」

「腰が……もうガクガクだよ……」

「えへへ……はあ……
私も……何だか腰が抜けちゃったかも……」

「えっ! ああ!
だっ! 大丈夫ですか」

「ごめんなさい!
この体勢……きつかったかな……」



「あはは♪
そうじゃないですよー!」

「お兄さんの愛情の重さで…
いっぱいもらっちゃったから…それで…」

「お…
とりあえず…大丈夫なのかな?」

「もう!」

「お兄さん、エツチの最中は雄弁なのに…
終わったとたん腰砕けになっちゃうんだもん…」

「うっ!めんなさい…
最中はなんだか気が強くなるというか…
本気だから…っ!」

「えへへ♪
そんなところも可愛くて私は好きですよ!」

「ああ……これで俺は完全に変態あつかいだなあ……」

「あら！」

それじゃ私は、その変態に犯されてしまう
可愛そうな女神さまってことですねっ！」

「おおう……そこまで言うか……」

「えへへっ！
気落ちしてる割には……あそこはバキバキで……」

「すっ、好きな体位なんだから当然！」

「でしたら、その好きな体位で思う存分
楽しんでください！」

「私も……その立派なのが欲しくて……
うずうずしちやっつて……」

しゅ

しゅ

「後ろから突くのに興奮する変態に、犯してくださいなんて…」

「本当の変態は女神さまの方なんじゃないかなあ〜？」

「あれえ？」

「それでお返しのつもりですかあ〜？」

「お兄さんもまだまだですなあ〜…」

「くっ…！」

「だけど俺は知ってるんだ！ぶち込んでしまえば…この女神さまは一気によがり狂うんだって！」

「あはは！強がっちゃってえ…！」

「さあ！今ぶち込んであげるよ！」

「女神さまのキツキツま〇こにねっ！」

「ああ〜れえ〜犯されるう〜！」



「んんんんんんんん!!!」

「ひぐううう……」

「ほおらどうだっ！」

お気に入りのち○ぽ！ぶち込んでやったぞ！」

「はっ……はっ……」

えへへ……たっ、大したことはないですねえ……」

「何回も出したから……」

流石に今回は小さいかなあ……」

「くっ……！
口の減らない女神めっ！」

「んんん……
今女神を征服してるのはこの俺なんだ！
好きなように楽しませてもらうさ！」

「ほらほら……
まだまだ体力は有り余ってるからな！」

「あああああ！はあああああ！
あぐつ！……えへへ……頑張っちゃって……」

「ひあああああああ！あぐつ！あああああ……！」

「どうだ！」

「どうなんだ女神！」

「征服されて、
好き勝手腰を振られてるんだぞ！」

「あああああぐつ！
ひあああああ……！」

「あああ……でもやっぱり……
女神さまのま○こ……最高……！
突きたびにどんどん快感が増していく！」

「あああああああ！
私も……強がっちゃったけど……やっぱり気持ちいい！」

「もう降参するのかわ？
強がった割には…早かったな！」

「あぁっあぁはぁぁ…
からかうとすぐに本気になるお兄さんが…
あぁぁぁ…ちよっと面白くて…あっ！」

「^^^^…
俺も…おだてればすぐに乗ってくれる
女神さまが可愛くて…」

せく

「あぁぁぁぁ…！」

お互いに強がっちゃって…
あぁぁぁぁ…でも気持ちいいのは、気持ちいいもん！」

「あぁぁぁぁー！」

いつまでもいつやって女神さまと愛し合っていたいよ！」

「わっ…私もですっ！」

ぱん

「お兄さんはカッコよくて……！
エッチしてる時も愛情……たっぷりだし……！」

「近くにいると安心……あっ………できるからあ……！」

「本当に……！」

「本当にそう言ってくれるの……？」



「あああああ……！」

「本当ですう……！お兄さんにいつまでも近くに居てほしいですう……！」

「へへ……本気にしちゃうからね……！」

「女神さまとあろう方が、嘘なんて言いませんよね……！」

「はああああい……！」

「本当に……本当に大好きですう……！」

「はあ……すっかり楽しんじゃったよ……
今日は本当にありがとう！女神さま！」

「えへへ♪
そう言っていただけなら、
私も頑張ったかいがありました！」

「……今日だけじゃなくて、
また来てくれますか？」

「そりやもちろん！」

「今日のこの一回だけなんて、
寂しすぎるよー！」

「また必ず女神さまに会いに来るからね！」

「……女神さまに……ですか……」

「えっ？」



「んあああああ女神さま！」

んんんんん

「あああああつああああああああ！」

んんんんん

んんんんん

んんんんん

「あっはあ…はあ…」

「熱い…ああ…熱い…」

「また…出しちゃったよ…
遠慮なしにぶっかけちゃったよ…」

「ザーメンでいっぱいになれちゃいました…
熱いザーメンで火傷しちゃう…」

「今の君の姿…最高だよ…」

ゴホオ...

ハァ

ハァ

「いままで見たどんなものよりも
今の君が最高に綺麗だ…」

「うふっ
そんな見え見えのおだて、
お上手ですね♪」

「そっーそんなんじゃー！」

「えへへ♪」

「冗談ですよ♪」

「だけど・・・本当にありがとうー！」

「ごちそうですー！」

「今までのどんなお客様よりも、お兄さんと過ごした時間が一番楽しかったです♪」

ハァ♡

ハァ♡

「本気になるからね！」

「エッチとなったら本気にしちゃう僕だからね！」

「本気になってくださいー！」

「その度に私も本気でお相手させていただきますー！」

「何度でもー！」

「……あつ……あのや……」

「……はら」

「うすうす……考えてらたどらうか……
思ってたんだけど……」

「……おっしやうてくたさ」

「僕のこと……その……」

「……」

「……」

「正直にー！」

「えっ」

「正直に言ってくれたなら、
女神さまはその者に……褒美をあげれるんですよー！」

「えっ！あつ……うん……えつと」



「僕のこと好きなのかなって…」

「好きになってくれたから
今日はこんな良くしてくれたのかなって…」

「…お兄さんはどうなんですか？
私のこと、好きになってくれたんですか？」

「そっ、そりゃ！
こんなに可愛くて、献身的な女性なら
喜んで好きになっちゃうし！」

「いつもそばに居てくれるなら
これ以上に嬉しいことなんて…！」

「えへへ♪
やっと言ってくれましたね♪」

「えっと…」

「女神さまの格好をしているから、
表面の私だけを気に入っているなら
それは寂しいなって…」



「そうじゃなくて、私という女性を愛してくれるならそれが一番嬉しいなって……」

「女神さまを、じゃなくて、私自身を好きになって頂きたかったんです」

「……うん
とつても素敵で、「生懸命なところとか
近くに居てくれたら、どれだけ楽しいだろうって」

「僕自身そう思うよー!」

「本当ですか?」

「うん!これは僕の偽らざる本心!
僕の大事な人になってくれますか?」

「はいっ!」

「喜んで!」

「……ははは!
あははは!」



「ちよっ！
何を笑ってるんですか！」

「ごめんごめん！
何だかこの状況が可笑しすぎて！」

「自分の好きな格好をしてくれている女性が
しかもこんな淫らな状況で…
こんな話をしてるだなんて…」

「もう！
せつかくいい勇田気なのに！
水を差すようなこと言わないでくださいよ！」

「ごめんごめん！
でも…本来なら沢山あるハードルというか、
それら乗り越えてから行き着くはずのこの状況に
何もかもすっ飛ばしてしまったように…
可笑しい状況だよね！」

「…えへへ
そうかもしれないですね♪
たしかにおかしいです！」

「もっとっから雲田気でビロートークしたかったのに、
台無しだしちゃったね！」

「いえー！」

「こんな可笑しい状況、私も笑わずには居られないですよ！」

「そうっ…」

「はははーよかったよー！」

「お兄さんともっと仲良くなって
もっといろんなエッチ…したいなあ…」

「お望みとあれば、
どんなプレイだって…」

「全部受け止めてくれる？」

「えへへっ」

「痛いのかは嫌ですよ？」

「最高に気持ちよくて、相性のいい同士、
痛いなんて、こっちから願う下げやー！」

「愛の無いエッチも私は嫌ですからね！
お互いに気持ちよくなれるような…ね！」

「もちろん！後悔なんてさせないからね！」

「ああ…」

「ん？どうかした？」

「何だかこんな話をしたら体がウズウズして…」

「…僕の精液を垂れ流すその姿…
最高にエッチだね…
本当に僕のものになったって感じが…」

「ああ！

そういう関係になったからって
いきなり自分のもの宣言ですか？」

「そっ、そんなつもりじゃないけど…」

「その姿を見てたら…僕も熱く…」

「ああ…私のこの姿をオカズにしちゃうんですか？」

「最高にエロいよー」

女神さまが精液を股間から垂れ流す姿…最高にエロい！」

「ああ…また大きく…」

「今日はもう何度も出しちゃうつもりで…」

ドキ♡

ドキ♡

「僕だけの女神さま…！」

僕の精液でいっぱいにしてあげるからね！」

「女神さまを独り占めですかあ？」

女神さまを束縛して、

さらに精液、出しちゃうんですかあ？」

「ごめんね！」

女神じゃなくて、君自身を愛するなんて言った後にこんなこと…」

ツリツリ…

「だけども今は！
今は女神さまである君を…
君にぶっかけてさせて！」

「はい！
この姿の私で興奮してくださらー！
今はこの姿の私を！」

「あなたの好きなようにできる
この私を見て！興奮して！ぶっかけて！」



ドキ

ドキ

ムッ
ムッ

「ああ！嬉しいよ！
僕だけの女神さま！
女神さまにぶっかけるからね！」

「かけて！私にぶっかけて！
ザーメン垂れ流してる私にぶっかけて！」

「私を愛してくれる、
あなたのザーメンでいっぱいにしてえ！」

「やれやれ…お店の女の子に本気になって…
大好きだなんて言われて調子に乗ったな…」

「お店に来させて、指名してもらうのに必死なんだから
「こちらが気持ちよくなることを言うのはあたりまえだよな…」」

「あああ！大好きなんて叫んじゃうなんて！
恥ずかしくて顔から火が出るよ…」

「…ん？」

「お…お…お…お…お…」



「そりゃあんだだけ相手してくれたら
疲れるよな……」

「……ありがとうね……」

お店の中でのごこととは言葉、楽しかったよ」

「……むにゃむにゃ……」

……お兄さん……」

「寝言か……」

「お兄さん……大好きですよ……」

「……」

「バカバカ!
本気なわけないじゃないか!」



「むにゃ……お兄さんの……
おつきいおち○ほ……気持ちいいですう……」

「……夢の中の俺、今エッチしてるのか……
羨ましいな……」

「中だ……中を出してえ……」

「しかも中出しかよ……
まあ今日は俺自身そうだったけど……」

「まったく……股間を丸出しで
寝落ちして、しかもそんな寝言を……」

「……おは……」



「…僕のこと大好きなんだよね…」

「大好きな人とエッチするのは嬉しいよね…」

「寝落ち中でも…」

「むにやむにや…お兄さん大好きですう…」

「…」

「夢の中だけでなんて…悔しすぎるー!」





「んんあ...」

G

Shinji

「ああああ…やっぱり最高…」

「寝落ちしててもこの締め付け！」

「女神さまのアソコ最高！」





「また来ますからねー！」

またゆっくりとエッチしましょうねー！」

「むだやあ……はら……す……」

結局、あの後一発出してしまった…。

シャワーを浴びなおし、書置きを置いて出てきたが…。

何とも言えない至福の時間。

このようなお店があることを今更ながら驚愕している。

このようなお店を知っていて、

しかもそれを共通の話題として提供できるのであれば、
その者同士、強い連帯感を持てるのも納得できる。

先輩に心の底から感謝しつつ、
家路についたのであった。

191



次は自分が広げる番！

この世の中に自分という存在を広げるその手段として、
大いにこのお店を利用させてもらおう！

191



End.



奥付.

この度は当サークルのイラスト集
「あの子に会える噂のマッサージ屋さん vol.2」をご購入いただきありがとうございます。

前回の1作目もご好評をいただき、めでたく2作目の制作をすることができました。
今後もシリーズとして続けていければいいなと思っております。
まだまだ構図なども未熟なので、勉強勉強ですね。
3作目が完成した際は、是非ともよろしく願いいたします。

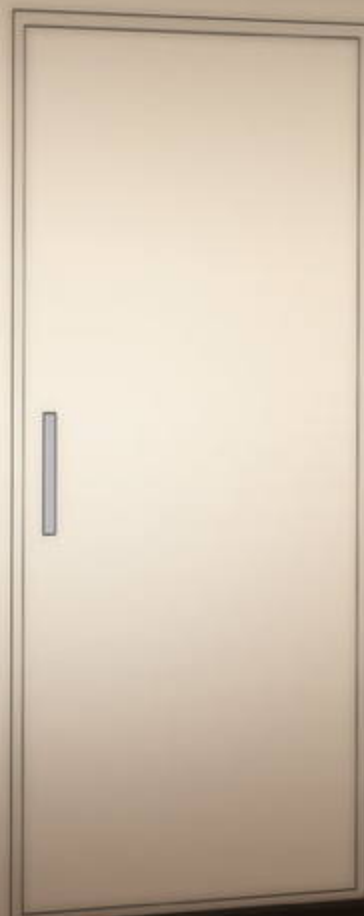
次に会うのは誰になるやら、、、

8月吉日
代表、tatsuya

制作 : Guild Plus
mail : super_sonico_saga@yahoo.co.jp
twitter : @guild_tatsuya



191

























































































































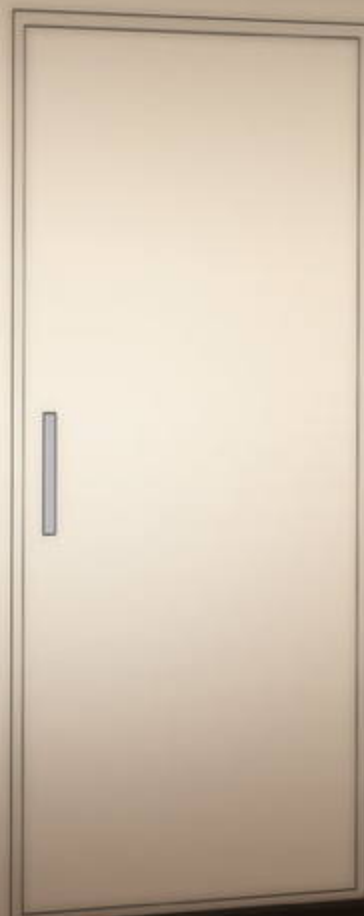








191



新社会人として十分とは言えないまでも、スタートを切ることができた今日この頃。

職場の先輩から勧められたとあるマツサージ屋。

取引先から紹介されたというそのお店は、

「自分の好きなキャラクターに会える」というものだった。

なんとも胡散臭い話だとは思いつつ、

そのお店の話を取引先とするようになってから、

仕事が順調になったとのこと……

正直に言えば、
自分もそういうお店には行っている。

いまさら嫌悪するわけでもないのだが、

やはり新しいお店というか、

初めての場所というのは警戒してしまう。

自分が新卒者であることも警戒を高める理由であろうか……
何事にも構えてしまうのだ。

しかし自分自身も今後は取引先とかかわることになる。
その場において、話のタネを用意しておくことに越したことはない。

先輩はそれで上手くいった。
もしかしたら、からかわれているだけかもしれないが……

だがしかし、

そのお店は完全な会員制。

自分の紹介した会員の評価はおのずと先輩にも関わることになる。
下手な人間を紹介することはないはずだ……

これは自分に対する、先輩からの期待なのか？

そんな「下手の考え休むに似たり」をブツブツと呟いているうち、
今日の終業時間を迎えた……

帰り際には先輩からの無言の目配せ……

「……行って来いってことか？」

何事も勉強！

食わず嫌いは良くないと自分に言い聞かせ、
勢いよく上着を羽織る。

そのままの勢いに任せて、
お店の方へと足を運ぶのだった……

先輩からもらった地図を頼りに、わき目もふらずに歩いてきた。
その場所はまったくもって普通の住宅街の中。

「先輩も最初は驚いたって言ってたけど……」

本当にこの場所で合っているのかと心配になった。
まさしく先輩と同じ心境だ。

看板らしきものも一切ない。
お店の場所を知らせる案内も見当たらない……
まさしく「知る人ぞ知る」ということなのか。

会員制であればそのようなものは一切必要ないだろう。
しかしそのあまりの思い切りの良さに、
ただただ驚かされていた。

191



「実際に来てみないと、雰囲気そのものって分からないよな……」
などといっちょ前に感心してしまった。
まだ入り口に立っただけだというのに……

少しばかり迷ってしまったが、
無事に指定された部屋の前までやってこれた。

このような機会でもなければ、
一生立ち入ることもなかったであろう部屋の前。

チャイムを押すだけでよいはずなのに、
少しばかり躊躇してしまう……

部屋の中の様子を知りたくて、ドアに耳を当ててみたり、
周りに誰もいないかと伺ってみたり……
ただただ不審な動きをしてしまっていた。

191



「…：我ながら情けない…：」
ガツクリ肩を落としてしまった自分にさらに情けなさを感じる。

実際には一、二分程度であったはずだが、
躊躇している時間はなんとも長く感じられた。

「先輩に認められるためにも！」

そして何より自分の将来のためだ！」

などと訳の分からないことを決意し、
ついにチャイムに手を伸ばした。

「ピンポーン」

191



案外大きく廊下に響いた音に少々驚かされる。

「……」

「……おや？」

応答がない。

「へっ、部屋を間違えたか」

一瞬で頭の中が混乱してくる。

確かに予約時に伝えられた部屋の番号。

躊躇している間にも何回も確認したその番号。

間違っではない。

191



「もう、もう一回……」

恐る恐る二回目を試す。

「ピンポン」

再び廊下に響く電子的な音。

ドタドタドタ…

「はっ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！」

191



なんとも慌ただしく、騒がしい感じの音が返ってきた。
一体何事かと、インターフォンに釘付けになった。

「あっ！あの…予約したもののなんですか…
大丈夫ですか？」

まだ顔も見えていない女性だが、
そのあまりの状況に心底心配してしまっていた。

「はっ、はいっ！大丈夫ですよ！」

「ごめんなさい！ちよつと準備に手間取っちゃって！」

予約とは何だったのかと、
そんな考えが一瞬頭をよぎったものの、
とりあえずその場は取り繕うことにした。

191

「あの、中に入って大丈夫ですか？」

「はいっ！もちろんです！
中どうぞ！」

少し落ち着きを取り戻したかのような声。
綺麗な響きが耳に心地よい気がした。

さすがに気になり声をかけてみた。

「…すいませーん…
いらっしやいますかー？」

その声に反応したのか、
慌ただしい雰囲気はこちらに向かってきた。

「はーはーいーめんなわー
んはまのー本音でいめんなわー」

「ああ…はい、慌てず…」

「失礼しまーす……」

重厚な扉を開くと、そこはいたって普通のマンションの一室。

ここがマツサージ屋であるという知識がなければ、ただただ一般人の住む部屋に迷い込んだと思うだろう。

「……ヘルスみたいなお店とは大違いだな……」

そこにはまだお相手の姿はなかった。

ヘルスのようなお店であれば、扉の先やカーテンの向こう側に女性が立っていて、お出迎えしてくれるのが普通だ。

何やら奥からは慌ただしい雰囲気漂う。

「ふえええええああああ！」



「だっ！大丈夫ですかあ」

「あっ！……ふああああ」

「どっ、どうしたんですか？」

「ケガはありませんでしたか？」

「いっいっいっいめんさい！」

「……ののののの……私……おっすよいっすよらなまももの……準備してたんですけど、私……」

あめ

「えっ……ああ……はい」



「お出迎えもまだだったし、
急いで出なきゃって思ったら足が…」

「ごめんなさい!」

「ああ…いえいえ、大丈夫ですから」

「あっ…」

「えっ!どうしました」

「…衣装…似合ってますね」

「えっ!あっ、そうですか?」

「指定の衣装は「こちら」であってましたか?」

「はい!もうバッチリですよ!」



「せっかく衣装も指定してくださったのに……
ごめんなさい、こんなお出迎えになっちゃって……」

「ああ、いえいえ……むしろイメージ通りというか……
それっぽいというか……」

「えっ？ それってどうい……」

「ああー何でもありませんよー」

「どうですか……っ」

「でっ、では……さっさとすけど、
「こちらの……いま私の背中の方にある部屋が
シャワールームになっておりますー」

「まずは「こちら」で汗をお流しになってくださいー」



「中にあるアメニティーなども自由にお使いください！」

「わかりました」

「いゆっくりとどうぞー！」



「いたたた…」

「指定したキャラクターはあの子だったし、まさしくイメージ通りって感じだな」

「…だけど、まさかあそこまでイメージ通りとは…」

「あんなにエロい子が近くにいる、なおかつ隣で寝てたりするのに、どうして手を出さないのか疑問だったけど、実際毎日あんな感じだったりしたら手を出す気にもならないのかな…」



「…うん」

何を真面目に考えているんだ、俺…」

「あの子はあんなにエロい子だったし、まさしくイメージ通りって感じだな」

「…馬鹿野郎、
何を期待してんだ俺は！」

「だげ…生殺しもららんと…
「はあ…」



「…だけど、」

「いざ目の前に来られたら…嬉しいよな」

「俺の大好きなキャラクターだし…」

「この店を紹介してくれた先輩には感謝しないと」



「がちゃん！」

「…ん？」

「お湯加減、大丈夫ですか？」

「えっ！ あっ、はい！大丈夫です！」

「あっ！」めんなさい！

驚かせてしまいましたか？」



「ええ、あっいえー！」

「まさか入ってこられるとは思ってもしなくて！」

「えへへ、よろしければお背中を流してあげようかと…」

「えっ！ いいんですか！」

「はっ！」

「他の子はやってないみたいなんですけど、
マッサージ前にお話しした方が、よりリラクゼーションできるかなって」

「あっ！じゃあ タオルを巻きますから、
ちょっと待っていてもらえますか？」



「えっ？」

「タオルなんか巻いたら体を洗えませんよ？」

「でも…今裸ですから…」

「ああ、そんなお気になさらずに！」

「えっ！ あっ！ ちょっと！」

「失礼しまーす！」

「うわわっー！」

「どうぞリラックスしてくださいねえー！」

「べっ、どうも…ありがとうございます…」

「えへへ、お背中洗いますねー！」

「ごめん…こんなことしてくれるとは思ってもないくて」

「結構、これ評判いいんですよ！」

「お店からはある程度自由にしていいって言われてて、これは私からのサービスです！」

「ぞっ、そうなんだ！」

「てっきりシャワーは一人で済ませるもんだとはかり…」

「普通はそうですよね！」

「だけど、せっかくの水の女神様！
シャワーからサービスしなきゃ！」



「あっ、そうらうとくも赤ちゃんど…」

「もちるんです！」

「指定頂いたんですから、
衣装だけでなく、ちゃんと本人になりきらないと！」

「…本人のようにね…なんだか納得…」

「あっ！さっきの」と思い出しましたね！」

「あれは本当にうっかりで…」

「うんうん分かってるよ、
女神様ともあるう方が、うっかりこけたりなんかしないよね！」

「あああ！ なんだか馬鹿にされてる気が！」

「あはははー」



「あああ……でも気持ちいいよ！
背中を流してもらうなんて何時以来だろう」

「今は一人暮らしですか？」

「そうだね、実家は大学の時に出てきたから」

「一人暮らしだと、ゆっくりお風呂に入るなんてことも
やらなくなりますがからね……」

「そうだね……何かと時間に追われるからね」

「今日はゆっくりしてゆっくりしてくださいね！
いっぱいサービスしちゃいますから！」

「サービス？
それってどんな？」



「えへへ、それは嬉しい嬉しい♪」

「私に会いたかったんでしょ？」
「とんりラックスして、口えごんねてらるすよー」

「そんな」と言われると…期待せずだよ…」

「…ん？」

「どうかしましたか？」

「えっ…あつらや…」

「何かを期待してるとは…」

「…ん？」



「はい、ではどりあえすシャワーは」のへらららららですかねー」

「えっ！あっ、うん……」

「体も綺麗になりましたし！

しっかりマッサージしてデトックス！
内側も綺麗にしましょうね！」

「そっ、そっですかねー」

「お体を拭きましたら、
棚にあります紙パンツを穿いてくださー」

「では私は」ここで失礼しますね！」

「ほっ、ほっーわかりましたー」

「慌てず、お越しになってくださー」



「シャワーお疲れさまでした!」

「さっそくですが、マッサージの方始めていきますね!」

「お願いします」

「はい!」

「どこか触ってほしくない場所とかあったら
遠慮せずに言ってくださいね!」

「力加減とか、いかがですか?」

「大丈夫ですよ!
むしろもっと強くてもいいかな…!」

「あっ!わかりました!
もう少し強めですね!」

「あっ、そうそう、
今ぐらいが丁度いいね!」

「はい!」



「お兄さんは……あつ、なんてお呼びすればいいですかね？」

「うん？お兄さんでいいけど……気になる？」

「あつ！いえいえ！

お客様なのにお兄さん呼びは失礼かなって……
気になっちゃいます……」

「そんな気を使ってくれなくていいよ」
「今日ここにはリラックスするために来たんだから、
楽しく、打ち解けてお話ししましょうよ」
「そう言っていただけだと嬉しいです！」

「では……お兄さん」

「うん、なんですか！」

「えへへ……」

「お兄さんは誰からのご紹介でこちらへ？」

「会社の先輩からだね

何かと俺のことを気にかけてくれて、
なんでも取引先の人がこのお店の常連だとか……」



「話の種として知っておくべきだぞってね」
「なるほどです」

「お兄さんもこのお店が気に入ったのなら、
是非新しい会員様をお連れくださいね♪」
「営業に関しては流石というところだね!」

「あっ!でもお兄さんが来店の際には、
必ず私を指名してくださいね!」

「あはは!抜け目ないね!」

「そういうつもりなら、
今日はしっかりサービスしてもらわないと!」

「はい!しっかりご奉仕させていただきます!」



「ご奉仕…か…」

「うん？どうされました？」

「あっ！いや…なんとも耳に心地いい言葉だなんて…」

「お客様の要望にお応えするのが私の役目！
何なりと仰ってください！」

「うん…」

「あっ！今何か考えましたね！」

「えっ あっ、いやそんな…！」

「誤魔化せないですよ…えへへ」

「今私がどんな体制でマッサージしてると思ってるんですかあ〜？」

「どんなんて…」



「あっ！お尻が…その…乗っかって…」

「もう…」

「さっきからお尻に何か固いものが当たってるんですよねえ…」

「マッサージに使う棒か何かがお尻の下に入っちゃったのかな？」

「あっ、あの…ごめんなさい！」

「シャワーの時から、抑えがきかなくて…」

「あはは」

「まっ！でも…女神さまのマッサージを受ければ、

誰でもそうなっちゃいますよねえ」

「お兄さまが健康な証拠ですよ！」

「いめんね…でも…そう言ってるだけではくれならぬ…」

「ええ？何でもどく必要があるんですか？」

「私はマッサージをしているだけですよ？」



「えっ！あぁいや……それはそうなんだけど……」

「ほら！足のマッサージをしますからね！」

「グイッ！グイッ！」

「あっあっ！」

そんなにお尻を前後されたら……擦れて……！」

「はいっ！力を入れるためにも……！」

体全体を使ってマッサージしていきますよー！」

「はいっ！はいっ！」

「えっ！あっ！」

「待って待って！そんなに擦られたら……！」



「血行がだいぶ良くなってきたみたいですね!」

「体中熱くなってきませんか?」

「マッサージをして、血行が良くなっているサインですよ♪」

「う、うん……おかげさまで……だいぶ……」

「このままの体制でもいいんですけど……」

「もっと念入りにマッサージさせていただきたいので……」

「足を開いて、内ももあたりをほぐしていきましよう!」

「あっ、はい……お願いします……」

「はいっ!」

「ではちょっとわたくし、退かせていただきますね♪」

「お兄さまはゆっくりでいいですよ!」

「急に動いたりすると、腰に負担がかかりますから!」

「ゆっくりと体制を変えてください♪」



「(マッサージは本当に気持ちいいけど...)」

「(本当にこのまま、マッサージだけで終わるのか?...)」

「(もしそうだとしたら生殺しだな...)」

「お兄さま?
いかがなされましたか?」

「えっ」

「あっ、いやー何でもないよー何でも...」

「...ですか?」



「はいそれでは足を開いて、リラックスしてくださいね!」

「はいはい、こんな感じでいいかな?」

「はい!」

「それでは足の付け根から、順番にほぐしていきますね!」

「ああ…内ももあたりがだいぶ凝ってますね…」

「気合入れてほぐさせていただきます!」

「営業で歩き回ってるからねえ…」

「自分でストレッチとかもしてるんだけど、なかなかね…」

「歩き通しや立ち仕事の人は大変ですよね…」

「まかせてください!」

「私がしっかりとほぐして差し上げます!」

「大丈夫と分かったとたん、
もっともっとつておねだりですか？」

「遠慮がないですねえ〜」

「きっ、気持ちよくて…最高で…」

「えへへ」

「そうなら嬉しいです〜!」

フク
ニク♡

「遠慮なんてしなくていいですからね〜」

「リラククス♪リラククス♪」

「お兄さんの大きな大きなこりを
マッサージ〜♪」

「お兄さんの熱い熱いこりを
マッサージ〜♪」

「うめあああ……もっ、もっ、もっ、もっ、もっ、もっ……」

「えっ？何ですか？」

「もっ、もっ、もっ、もっ、もっ……」

「出るって何がですかあ……？」

「その……それだけやられれば、
そろそろ……」

「ああ……なるほど、

こりをほぐしてたんですもんね！

そろそろ温まってきたということですかあ……？」

「いや……そうじゃなくて……」

「この部分のマッサージはもういらですかねえ……
もうやめちゃうかなあ……」

〃〃!!

〃〃!!



「あー…待って待って…
もう少し…もう少しで…」

「ええ…もう十分にマッサージしたので…」

「あと少し…… あともう少しは…」

「もう少し…」

「…もう少し…」

「あーあーあー…」

「…あーあーあー…」

「ええ…」

「クッ！」

「クッ！！」

「クッ！！」





「うおおおおおおおおおおおお」

00%

00

「あらあらあら……」

「はあはあはあ……」

「マッサージをしてただけなのに……まさか射精をしちゃうなんて思いませんでしたよお……」

「えっ」

「だって今僕の求める癒しをしてくれるって……」

ア
♡

「そうは言いましたけどお……エッチな意味でなんて言ってませんし……」「いっとういっとうとされると困るんですよえ……」

「えっ えっ はっ」

「そっ、それは冗談……だよね……？」

「うんっ？」

「困るってのは本当ですよお……」

「……はっ」



「私がさらにエッチなことをしたくなつちやうって意味で……
困っちゃいますねえ……」

「……」

「こんなに大きくて、固くて……
それでいてこんな力強い射精ができる……」

「もっとエッチなことをしたら……気持ちいいんだらうなって……」

「……女神さま、もっとエッチなことを求めてもらいますか」

「……それがお望みなんですか？」

「女神さまと もっと気持ちいいことしたいです！」

「させてくださいー！」

「お望みのことをして差し上げるのが私の役目……
だけど……これ以上のことは怒られちゃうかもしれませんよ？」

「女神さま……ここまでできたなら僕もはぐらかしたりしません！
女神さまと気持ちよくなりたいですー！」

「えっ！ あっ」

「(内ももをマッサージするからしようがないとはいえ……)」

「(股間に顔が近いなあ……鼻息が……)」

「ぷんぷん……ぷんぷん……」

「あっ、あのぉ……」

「はいっ！
どういたしました？」

「一生懸命やってくれてるところ悪いんだけど……」

「はいー」

「ちょっと股間に……その……」

「？」

「あっ！もしかして紙パンツがズレちゃいましたか？」



「そっ、そうじゃなくて……」

「それでしたらちょっと直して差し上げます!」

「ちょっと失礼しますね!」

「あっ!いや!そうじゃなくて!」

「あっ!」



「……あ」

「あつーいやこれはー」

「……」

「ごめんね！すぐに戻す……」

「気づけなくて申し訳ありません……」

「えっ」

「私の役目はお客様をリラックスさせ、
お疲れをとること……」

「……はら」

「それなのにこんなに大きな（こり）を見る（け）ることができないなんて……」

「えっーあつーいや……これは……」



「お任せください！
私がしっかりと（こり）を取って差し上げます！」

「わっ！わっ！わっ！
ちよっと何をして！」

「何って、マッサージですよ？
大きな大きなこりを取って差し上げます！」

「あの…出しちゃったことは謝るから！
だから…そんなことは…その…」

「マッサージ屋さんに来て、
マッサージを断るなんて…」

「そんなお客様はいらっしゃいませんよ？」

「さっ！どうぞリラックスして、
私に体をあずけてくださいまし！」

「えっ…ほっ、本当に…っ？」

「はいー」

＃
♡
♡

「（本気なのか……からかわれてるのか……？）」

「あははー！」

「えっ なっ、何？」

「急なことでまだ頭が追いついていないって感じですねっ」

「あっ、はい……」

「このお店は会いたい子に会えるマッサージ屋さん！
憧れの子に会って、マッサージしてもらえて、
そして日々の疲れを癒せる場所」

「お兄さんの求める癒しを、わくしが シテ 差し上げる」

「ですから……何なりとお申し付け下さればいいんですよー！」



「僕の求める癒しを……？」

「はい」

「お兄さんの求める癒しは何ですか？」

「……女神さまと……」

「はっ」

「女神さまと一緒に気持ちよくなりたい！
気持ちよくしてあげたいです！」

「えへへ」

「何だかまだ抽象的な言い回しですね♪」

「でも！わかりましたよ！」

「一緒に気持ちよくなりたいんですね！」

「そっ、そうですよ！」



「わかりました！」

「ではまず、今私の手の中で熱く、固くなっているこれを……
気持ちよくく、気持ちよくくして差し上げますね！」

「おっ、お願いしますー！」

「はいっー！」

「強かったりしないですか？
痛いようだったら言うってくださいね！」

「痛いどころか……もっと強くしてくださいさー！」

「えへへ」

「流石に元気ですね」

「ならもっと早くしていただきますねー！」

「うめああ……らららですー……もっとー！」

「だて」
♡

「うっ」
♡

「えへへ…押し倒されちゃいました…」

「その…ごめん…
なんだか我慢できなくなっで…」

「あれえっ…ごまかされておられて怖気づらちゃいましたか？
女神さまを押し倒しておらで…」

「えっと…」

ド
キ

「せっかく私もその気になったのに…
お兄さんが嫌ならしようがないかなあ…」

「ああ！待って待って！
したいです！
女神さまと一緒に気持ちよくなりたいんです！」

「えへへ…
正直に言えたじゃないですか？」

「正直者には女神さま、ご褒美をあげないといけませんね？」

「おっ、お願いします！」

「…もっ…そろそろ…」

「えっ？…あつ…！」

「中に出すのは…さすがに…」

「嫌っ！」

「えっ」

「外になんて出さないでええええ！」

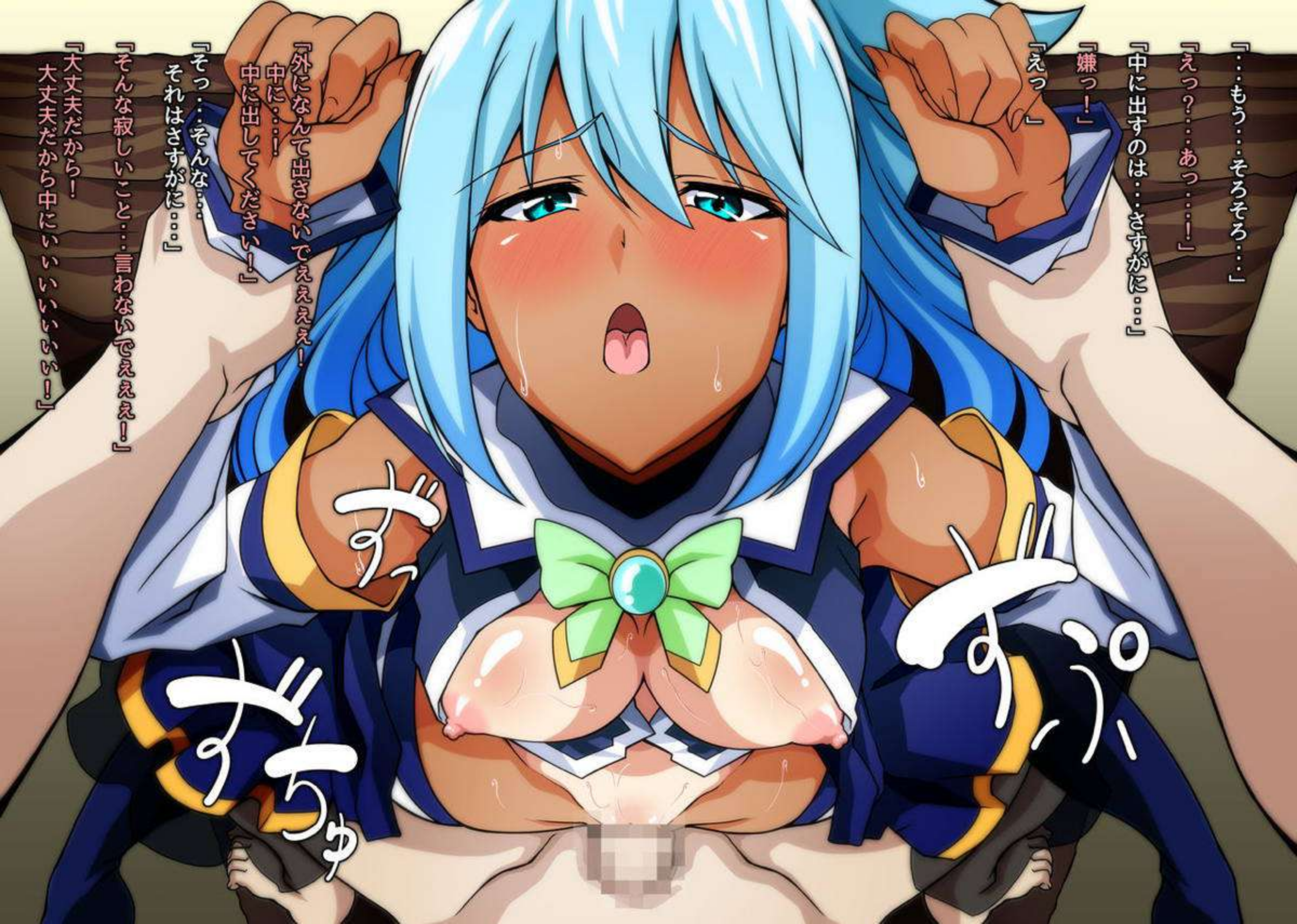
「中に…！」

「そっ…そんな…」

「それはさすがに…」

「そんな寂しいこと…言わないでええええ！」

「大丈夫だから！
大丈夫だから中にいいいいいい！」





「あっああああああああああああああああああああ！」

びびる

びびる

びびる

びびる

「…うっ…はあ…はあ…」

「おなかの中…熱い…熱い…」

「溢れちゃい…ましたね…」

「はっーはっーはっー！」

「だっ、大丈夫でしたか」

「はいっ…ちよつと…」

「気持ちよすぎて…身体が熱くなりすぎちゃって…」

「遠慮なしに出しちゃいました…」

「えへ…えへへ…」

「これは誤魔化しようがないほどだ…出されちゃいました…ね」

「女神さまを種付けしたんですよ…」

ふ

ぽっ

「もう最高で……今までで一番気持ちよかった……かも」

「えへへ……お世辞でも嬉しいです！」

「いや！お世辞なんかじゃなくて！」

「えへ！
必死になっちゃうところとか……可愛いです」

「ハァ♡」

「ハァ♡」

「そんなことは……お店でセックスしちゃうような
ひどい客だよ……僕は……」

「あれ？
また怖気づきましたか？
ここままでしちゃってるのよ……」

「うっ……それは……
賢者タイムというか……その……」

「もう……そんなガツクリしないでください……」

「しょうがないなあ……
若いんですから、まだまだお元気ですよね？」

「えっ……？」

「体力だってまだまだたっぷりあるはずですよ！」

「お兄さんが満足しても、私がまだ満足してません！」

「それは……」

「今晚のご予約はお兄さん一人、
まだまだお相手できますよ！」

「ほっ……本当に」

「うっ……まずは……そうだなあ……」

「次の（マッサージ）に移る前のお掃除が必要ですよね！」

「……掃除？」





「はいっ」

「お掃除♪
お掃除ですよおっ」

「だけど、このことは絶対に内緒ですからね♪」

「はっ、はい！もちろん！」

「お兄さんが正直に、私と気持ちよくなりたいたいと告白してくれた…
それで私も気持ちが高ぶって…いいですね？」

「誰にも言いません！」

今後紹介する人たちにも、絶対に！」

「自分も」褒美がほしいなら、自分自身から行動！
お兄さんはちゃんとそれができましたね♪」

「はい！女神さまに会えるよう、
お仕事頑張ってるし、勇気を出してお店にも来ました！」

「えへへ♪」

「…だけとお兄さんが好いてるのは、
あくまで女神さまを…なんですよね…」

「…ちよつと残念…かな」

「えっ？」

「それってどういふ……」

「いえー何でもありませんよー！

「それよりもほらっ！このまま何もしないんですか？」

「あっーいやー！

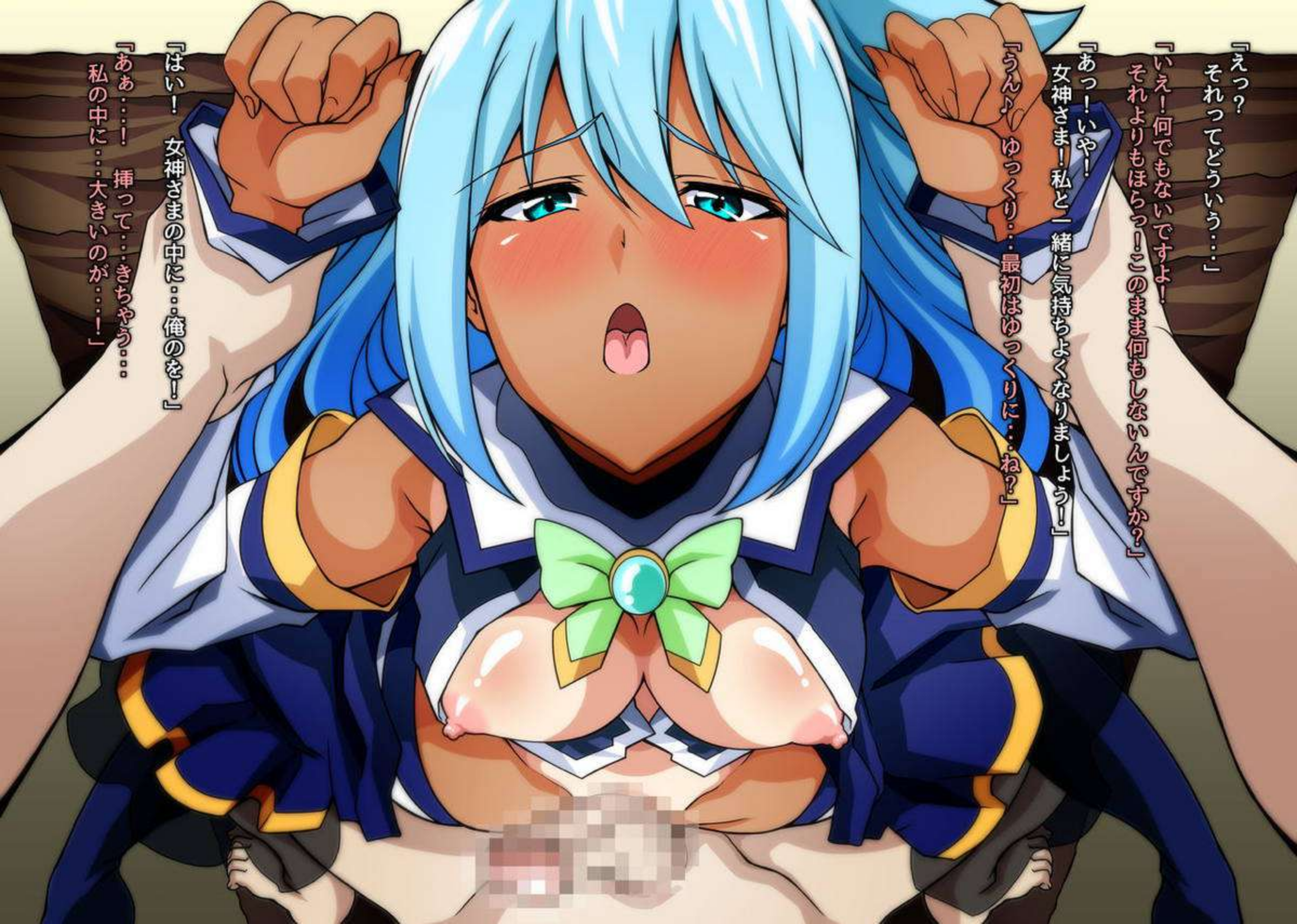
「女神さま！私と一緒に気持ちよくなりましょうー！」

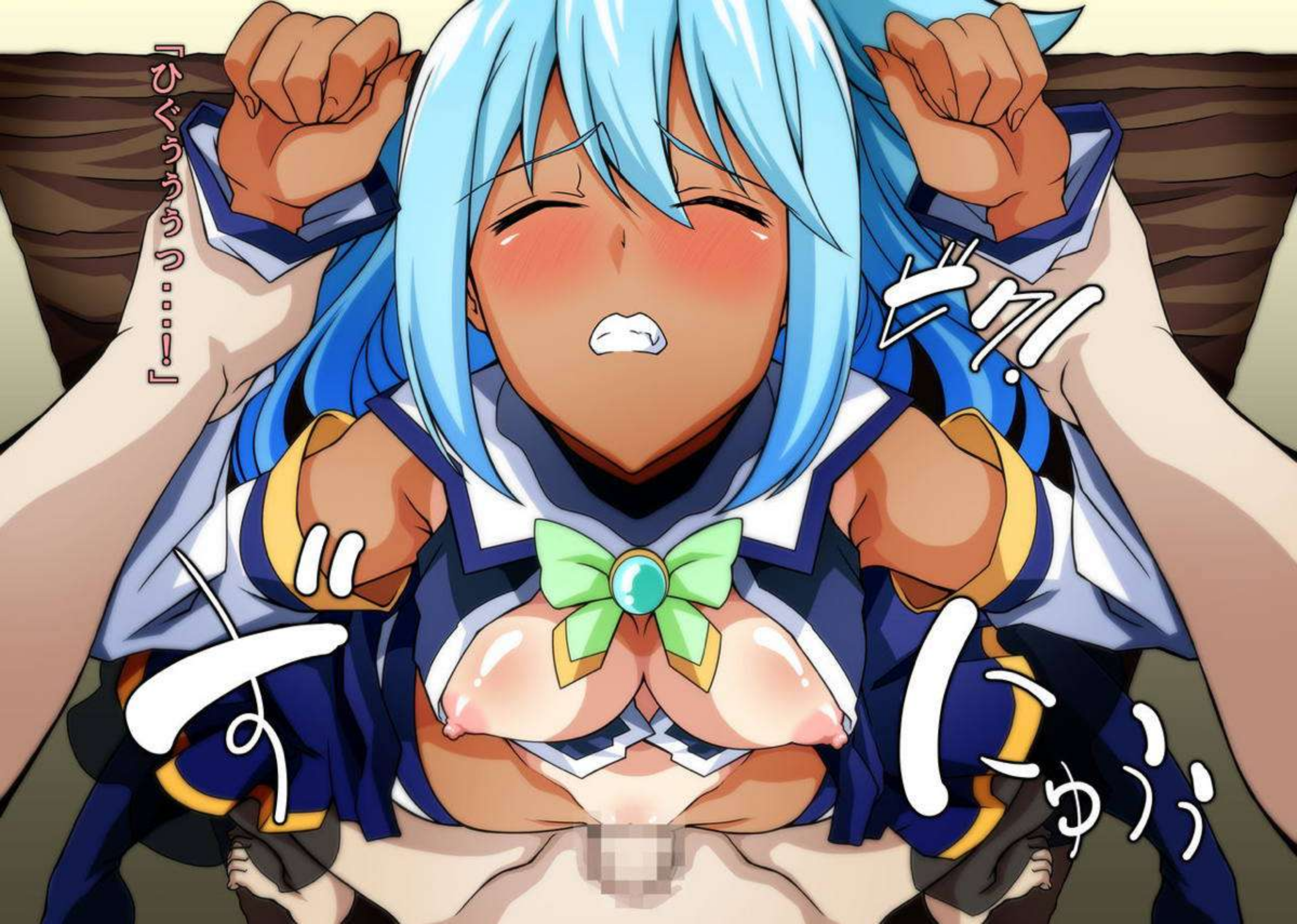
「うん♪ ゆっくり……最初はゆっくり……ね？」

「はい！女神さまの中に……俺のを！」

「ああ……！挿って……きちやう……

「私の中に……大きいのが……！」





『.....』

「あああ……はっ……！」

「はっ……挿りました……よ！
女神……さま！」

「はっ……はっ……はああ……！」

「ギッチギチ……だっ……！」

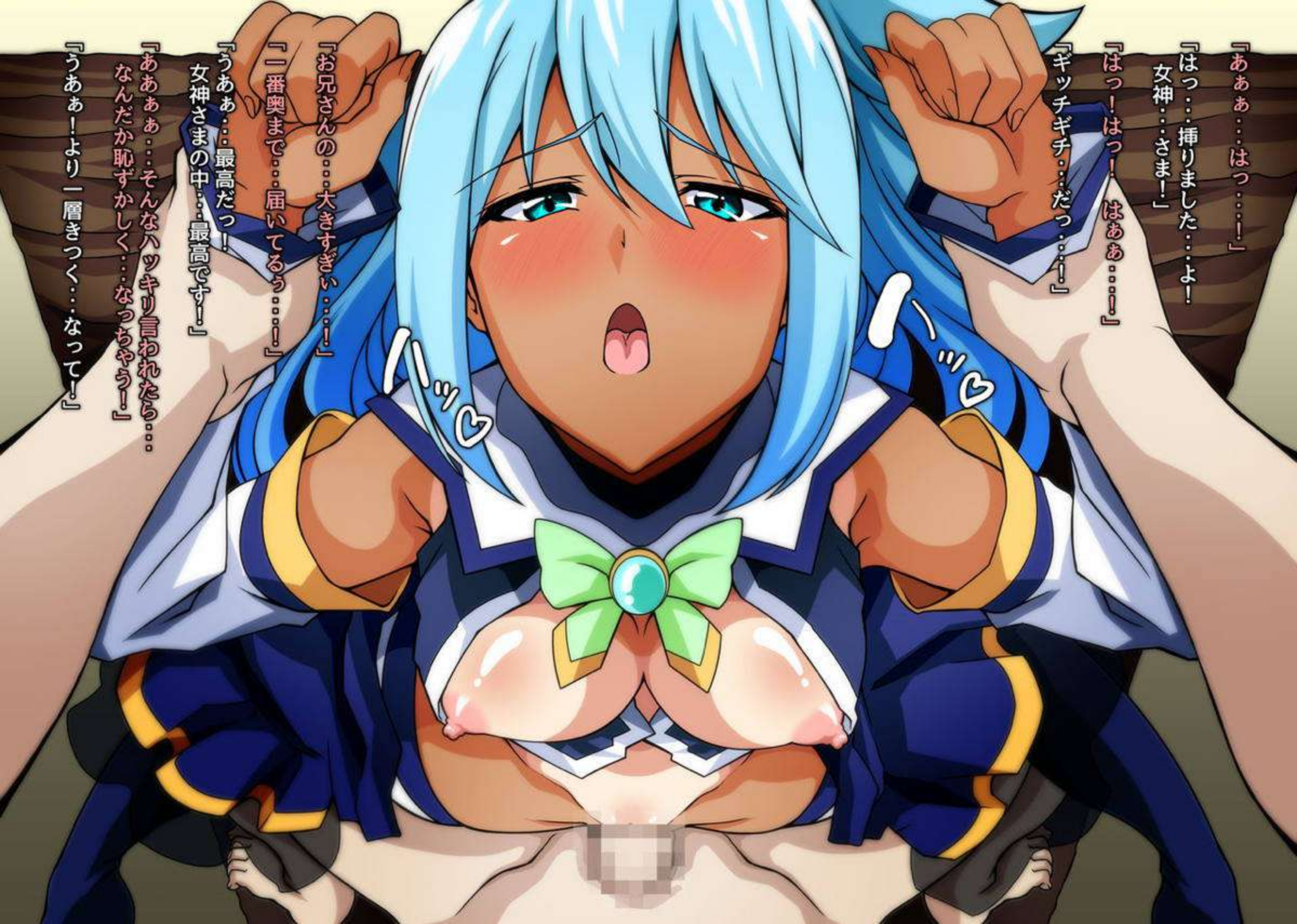
「お兄さんの……大きすぎ……！」

「一番奥まで……届いてる……！」

「うああ……最高だっ！
女神さまの中……最高です！」

「ああああ……そんなハッキリ言われたら……
なんだか恥ずかしく……なっちゃう！」

「うああ……より一層きつく……なって！」



「女神さまは声に出して説明されたりすると……あそこがきつくなる体質なのかな？」

「いやあ……そんなハッキリと言わねえんだからー」

「ほら！今もあそこがギュツツ・ギュツツ・っどー」

「そんな……」

「この状態で突いたら……どうなっちゃうのかなあ？」

「えっ！はあああ！」

「そりゃー！そりゃー！」

「あっーひああああー！
ゆっくりとー最初はゆっくりとおおおー！」



「あああああーキツイー！
女神さまのま○こー！
最高にキツイー！」

「あつーあつーあつー！
ひあああああああああああー！」

「突かれるたびに……！
身体が……！」

「感じてー僕ので感じてーくださいー女神さまー！」

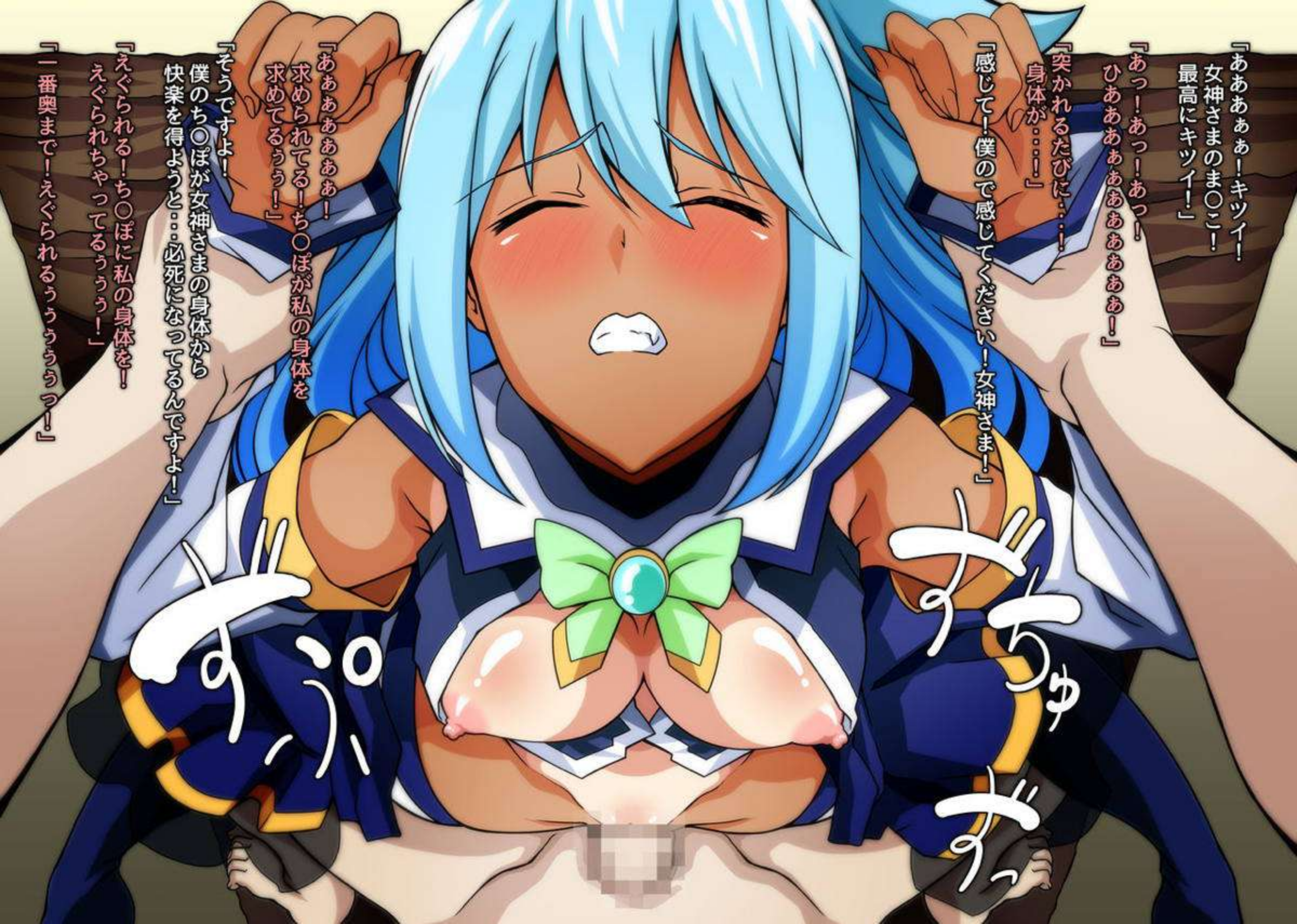
「あああああああー！
求められてるー！ち○ぽが私の身体を
求めてるううー！」

「そうですよー！」

「僕のち○ぽが女神さまの身体から
快楽を得ようと……必死になってるんですよー！」

「えぐられるー！ち○ぽに私の身体を！
えぐられちゃってるうううー！」

「一番奥までーえぐられるうううううー！」



「このお店に来たかいたがよかったあ！
こんな最高のお店！
何で今まで僕は知らずにいたんだらう！」

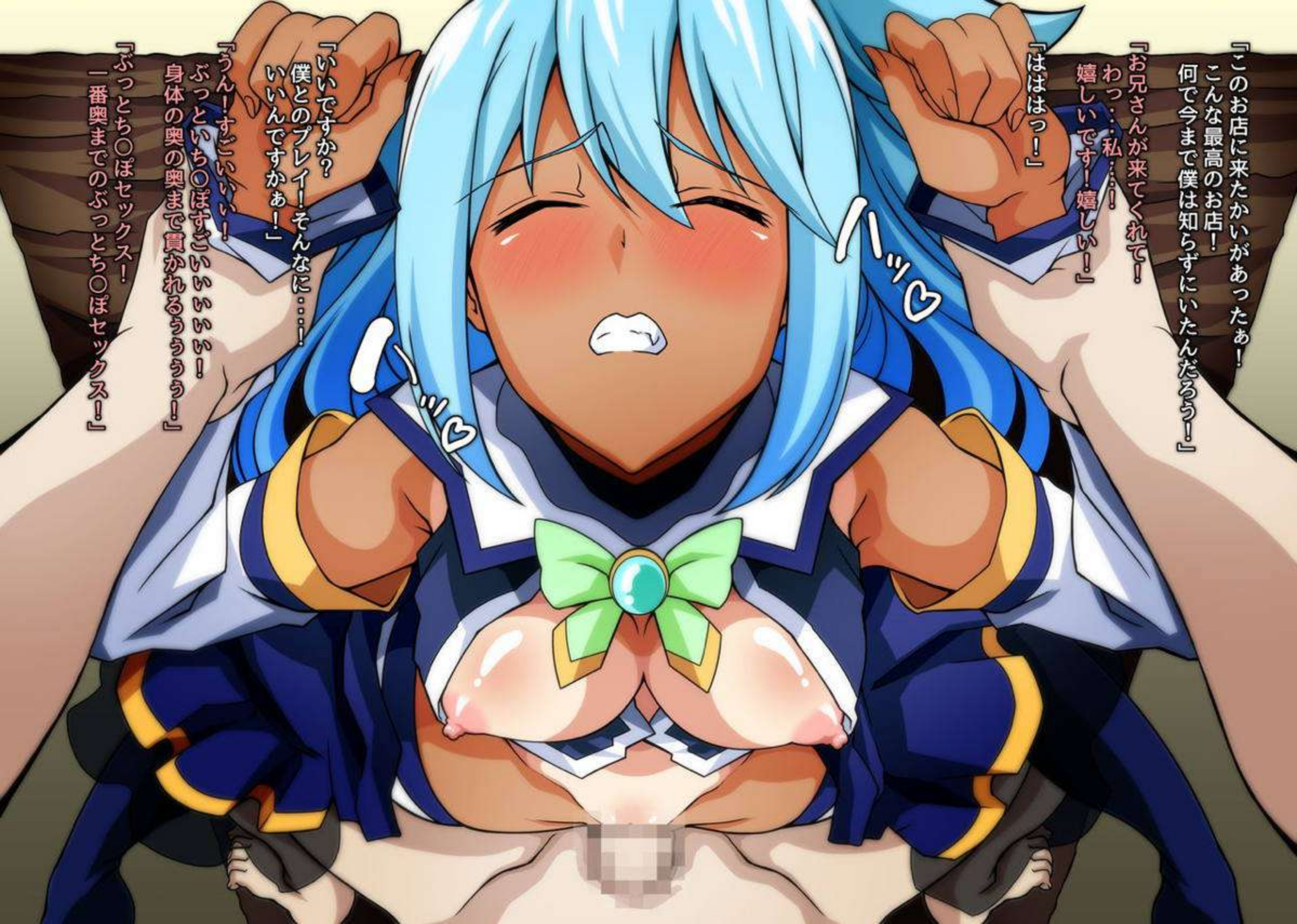
「お兄さんが来てくれて！
わっ…私…！
嬉しいです！嬉しい！」

「はははっ！」

「いいですか？
僕とのプレイ！そんなに…！
いいんですかあ！」

「うん！すごいっ！
ぶっといち〇ぼすいっ！
身体の奥の奥まで買かれるうううう！」

「ぶっといち〇ぼセックス！
一番奥までのぶっといち〇ぼセックス！」



「ああ……！」

「言っちゃった！セックスって言っちゃったあああ！」

「女神さま……」

「女神さまはプレイ中は気持ちが高まっちゃうんですか……ね！」

「そんなはしたない言葉を叫んじゃうなんて！」

「はいっ！ごめん……なさい！」

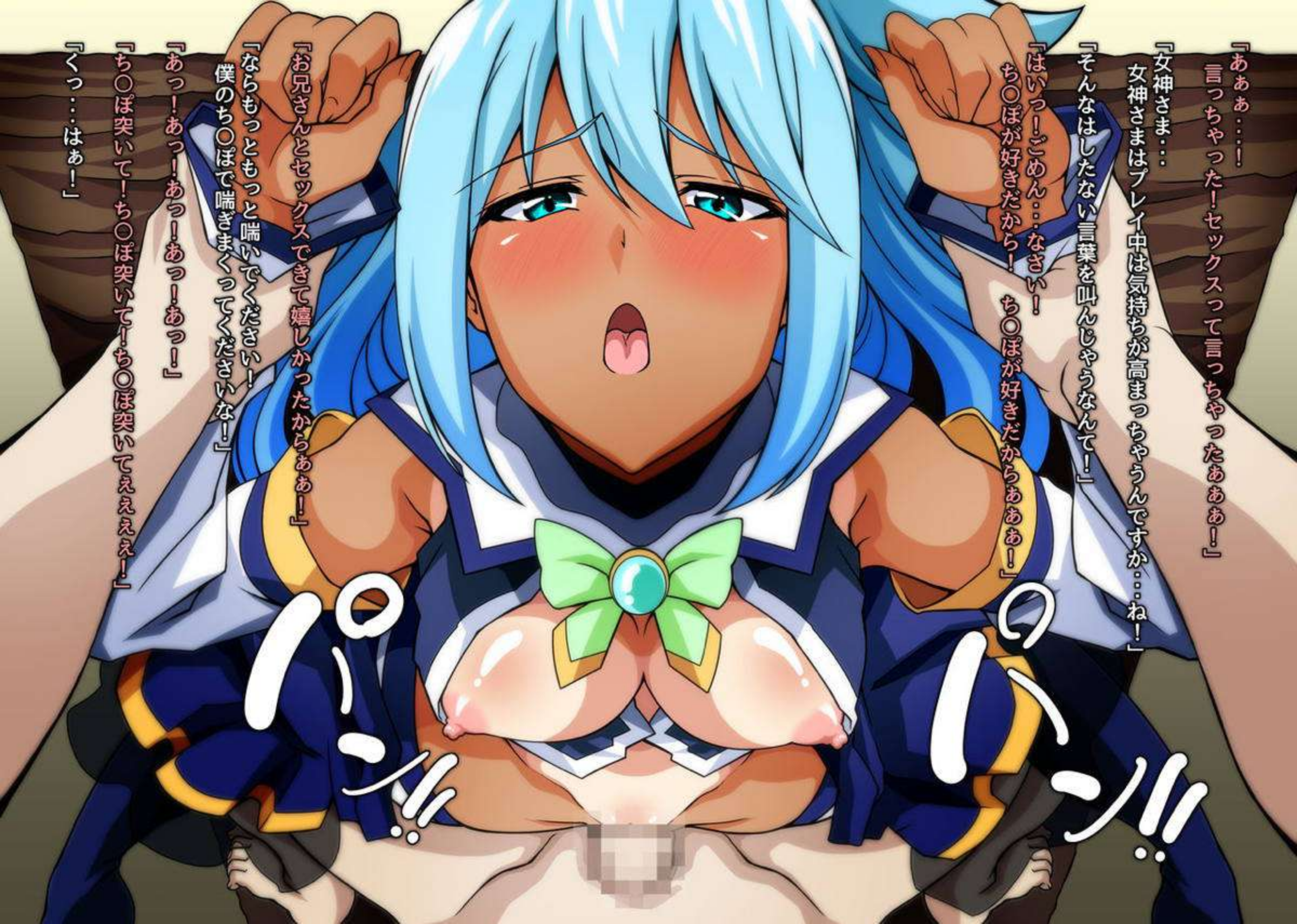
「ち○ぽが好きだから！ち○ぽが好きだからあああ！」

「お兄さんとセックスできて嬉しかったからああ！」
「ならもっともって喘いでください！」
「僕のち○ぽで喘ぎまくってくださいな！」

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いてええええ！」

「くっ……はあー！」



「そちらにお立ちください」

「いっ、いっ、これでいいのか？」

「はい！」

どうぞリラックスしててくださいね」

「鼻息が当たるほど近いね……」

「くすぐったいのですか？」

ヒク

ヒク

「さっき出したばかりだからね……」

あの……まだ洗ってないけど……」

「そんなの気にしません！」

ああ……こんな大きいのが私の中に……」

「立派ですね……目の前だと特に……」

「このまま出しますからね！
女神の口は……！
出しますからね！」

「んんんんっ！
んん！」

「んんんんんっ！」

「んんんんんっ！」

「んんんんんっ！
んんんんんっ！」

「んんんんんっ！
んんんんんっ！」

「んんんんんっ！
んんんんんっ！」

「んへえあああああ……」

「げはっ……おええ……」

「あぐう……はあ……はあ……はあ……はあ……」

「うえええ……はあ……」

「だっ……大丈夫だった？」

「うええ……はっ……はい……」

「だい……大丈夫です……おえ……」

「気持ちよすぎて……女神さまのお口……最高です……」

ごぼ♡



ア～♡
ア～♡

「よっ…喜んでもらえて…
よかった…です…」

「好き勝手に腰をふっちやっつて…」

「ふう…ふう…」

「大丈夫です！なんだか頭がクラクラしちやいました…」

「今私、犯されてるって！」

「好き勝手に使われちゃってるって…
それが余計に興奮して…」



「今までやったことない…」と…

「経験させてもらえて…」

「来たかいがあったよ…」

「えへ…そう言ってもらえるなら
頑張った甲斐がありました！」

「…でも」

「どうしました?」

「これじゃお掃除の意味がないね」

「えへへ。。。そうかもかもしれませんね♪」



7~♡

7~♡

「女神さまに可愛がってもらったから
いつも以上に……かな」

「本当ですか？
それなら嬉しいです！」

「この後のマッサージを楽しんでいただくためにも
これからお掃除させていただきますね♪」

「うっ、うん……お願いします」

「えへへ……どうぞ力まずに
リラククスしててくださいさー」

「それじゃ……失礼します」

「んんむあ……」

「あっ！熱っ……！」

「んん……大きい……むぐう……」

「お兄さんのが脈打ってるのが……舌に伝わってきます……！」

「女神さまのお口の中……」

熱くて……ぬるぬるで……」

「んんむぐう……しっかりとお掃除させていただきます……！」

ぽっ♡



「ああ……気持ちいい……最高だ！」

「大きいから……んん……全部お掃除できるかな……」

「んん……むぐう……うむう……」

「女神さまのお口、最高！」

「そうやって必死に啜えてくれてる姿
それだけで最高に興奮するよー!」

「むぐっ……ありがとうございます!」

私は女神ですが、今はお兄さんに「奉仕するのが役目……」

「うへあ……遠慮なさらず」

私のお口を堪能なさって……ください……」

「言われなくても……ああ……」

すっかり楽しませてもらってるよー!」

「むぐっ、むぐっ……嬉しいですー!」

「その小さなお口いっぱい俺のイチモツが
啜えられてるんだね」

「はい……むぐっ……」

私のお口の中、ち○ぽでいっぱいなんです……」

「女神さまの身体を……全部俺ので満たしてみたいな……」

「うへあ……全部とはっ」

今もずっと……ずっと……」

ちぽ[。]
ちゅ

ちぽ[。]
ちゅ

「もっと奥まで啜えられるかな？」

「もっと、もっと……奥……ですか？」

「そう！もっと奥がいいなっ！」

「むぐっ！」

はっ、挿いる……かな……」

「女神さまの奥の奥まで行ってみたい！」

「はっ、はい……」

「チャレンジ……してみます……」

「ありがとう女神さま！」

それじゃ……お邪魔して……」



「あまのこ」

「あまのこ」

しん

せいの

B

「ああああ…」

女神さまの口ま〇ん！

「んっ！んっ！んっ！んんぶっ！」

「喉奥まで…俺のを…！」

「んっ！んっ！んんぶっ！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「女神さまの喉ま〇ん！」

「んんっ！ んんんんっ！」

ぐんぐん

ちゅる

ちゅる



「ああ……ごめんね！
さすがに苦しかったよね……」

「ああああ……はあ……はあ……
のっ……喉まで犯されちゃいました……」

「大丈夫……ですよ……
ちよつと頭がぼおーつとしちゃって……」

「まだできるかな……？」

フウ♡

「はっ……はい……頑張ります……！」

「なんだか……これ……
犯されてるって感じがして……なんだか……」

「らっ、嫌ならもうしならよー！」

「いえ……やらせてください……
私の喉……喉ま○……犯してください……」

ハッ♡

ハッ♡

「はっ…はい…
女神さまのすべて…！…犯します…！」

「んんんぶっ！んんんんん！」

「んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！」

ちゅぽ

「女神の喉ま〇い…」

今は俺専用の喉ま〇い…！」

「んんぶっ！んんぶっ！んんぶっ！
んんうおおおっしゅ…！」

「狭い喉のところが引つかかって！
俺の…ち〇ほ…擦られる…！」

「さて…お兄さん？」

「えっ…あつはい…」

「なんでしょうか…女神さま…」

「おまほは随分と好きにしてへんだからましたおっ」

「いっいめんな…おっ」

「えへへ♪」

「別に怒ってるわけじゃないですよお！」

「ただ、お兄さんが好き勝手したなら、
そのお返しもしなきゃですよね！」

「そっ、そうですね…」

「今度は私が好き勝手する番！
私に主導権！です！」



「んんんんうううううううう」



「お兄さん……大丈夫ですかあ……？」

「はあ……はあ……うん、大丈夫だよお〜」

「女神さまの腰ふり……この世のものじゃないみたいで……」

「私も……まで気持ちいいのは初めてかも……」



「下からの射精……私のお腹を貫いたみたいで……
お腹の中……ぐるぐる渦巻いてるみたい……」

「熱い……お兄さんの精液が……
私のお腹の中をぐるぐる渦巻いてるうう……」

「こんなに射精したのは……
女神さまとの相性がいいのかな？」

「本当に？
本当にそう言ったださいますか？」

「うっ、うん！
女神さまと俺…最高に相性がいいよー！」

「…女神さまと…ですか？」

「えっ？…あっうん…」

ハア♡

ハア♡

「そうですよね！
女神さまに会うためにいらしたんですもんね！」

「…」

「いめんさー！
変な」と聞いちゃいました…」

「あ…もしかして…」



「さあーさあー！
次はどういたしますか？」

「えっ！」

「さつきから射精しつづつもまだ元気な
お兄さんのち○ぽ！」

「私のお腹の中ですよと元気なままですよ！」

「攻守交代しますか？」

「うっ……うん！」

「次は……俺の番かな！」

「まかせてよー！」

「女神さまを満足させて見せるから！」



「その意味ですよーお兄ちゃん」

「（楽しいんだけど…なんだろ）のぞきまは…」



「お掃除もしっかりしたし、
私が満足するまでお相手してもらいますからね!」

「…むしろそれは主導権を握られるというより
ご褒美に近いような…」

「いつ、いいんですよ!」

「私が満足するかどうかなんですから!」

「そっ、そうですか…」

「お兄さんはどうぞリラククスしてください!」
「私がすべてやってあげます!」

「もし出そうになったら?」

「あっ!ダメですよ!

「私に主導権なんですから!

「私がいいって言うまで我慢してください!」

「うへえ…それはキツイなあ…」



「そんなイヤイヤでも、
」はしっかりと元氣じゃないですか！」

「そりゃ、女神さまの裸体を目の前にすれば……」

「嬉しうて言ってくたさいますね、
俄然やる氣になつてきますよ！」

「なんでそんなにノリノリなんだろう……」

「細かい」とはいいんですよ……
そろそろ挿れちゃいますからね！」

「へあ……あつはらーお願いしますー！」

「えへへ、いただきますー！」





「...」

「あつ…はあ…」

「一気に根元までいっちゃいましたよ！」

「はあ…やっぱり女神さまの中…
最高ですっ！」

「気を抜いて出しちゃわないでくださいわね！」

「私が満足するまでですよ！」

ハァ♡

ハァ♡

ひく

ひく

「きゅ、気を付けます…！」

「えへへへ」

意地悪言いましたけど、
お兄さんはリラックスしててくださいいね！
変に緊張してたら楽しめませんもんね！」

「おっ、おっ！」

「あっーはああ！
うっくっ…あああああ…」

「やっぱり…お兄さんの…固くて、大きい！」

「ああ…さっきとはまた違って…
俺のが…擦られる…！」

「いい…いいですよ！
お兄さんのち○ぽ最高ですううう！」

あ♡

「俺も…最高だ…よっ！
女神さまに腰を振ってもらえるなんて…！」

「はっ、はっ、はあああ…
正直者で…私の…おめがねにかなった方だから…」

「えっ？
今なんて…？」

すちゅ

ぎゅ

「あっ
いえっ！何でもありませんよ！」

「ほっ、ほらほら！
集中してください！女神のあそび…堪能してください！」

「うっ、うん…はい…」

「あっ！はっ！
うぐ…はあああああ！」

「女神さまに出会えて…俺は本当…
幸せです！」

「次も絶対に女神さまを指名しますよ！」

「本当…ですか！」

「ああああ…嬉しいです！」

「もっともっとお店に来て…私のこと…愛してください！」

「はいっ！」

「俺ももっとな女神さまの」と好きになりそうです！」



「あああ…はあ…」

「あっ！あそこがより一層しまつて…あぐっ！」

「愛してるなんて言葉…言われたら…
はあああああ…」

「女神さま…大好きです！
大好きですよ！」

「女神さま！」

「俺…もうそろそろ…」

「ええ！」

「もうですか」

「私まだイッてないんですよー！」

「もう少し…もう少し頑張ってくださいー！」



「こんな…激しまりのま○じや…
もう我慢なんて!」

「もう少し!あああもう少し!
お兄さんのち○ほでイキたいんですぅぅ!」

「はっ…はい!
もう少しだけ!もう少しだけ我慢!
我慢!」

「がんばって♡
がんばれ♡
がんばれ♡」

「お兄さんのち○ほでイキたい!
お兄さんのち○ほでイキたい!
お兄さんのち○ほでイキたい!」



「それじゃ今度は後ろからいいかな？」

「はい、バックですね！
ちよっと恥ずかしいですけど……」

「俺、この体位が一番好きなんだよね……」

「なんだかエッチしてるって感じがするし……それに……」

「それ……」

「この体位は女の子を征服してるって感があつて……
なんだか興奮するんだよね……」

「女神さまの全部を征服しちゃうつもりなんですわ……
ちよっとだけ怖いですねえ……」

「あああ！そんな本気で……そんなつもりはないんだよ」

「ただなんというか……その……」

「えへへ！冗談ですよ！

人それぞれ好きな」とって違いますからね」



「ひあああああああああああああ！」

「あああああ……ひああああ……
あああぐうう……」

「はあ……はあ……はあ……
これで……4?……5回目?……かな……」

「腰が……もうガクガクだよ……」

「えへへ……はあ……
私も……何だか腰が抜けちゃったかも……」

「えっ! ああ!
だっ! 大丈夫ですか」

「ごめんなさい!
この体勢……きつかったかな……」



「あはは♪
そうじゃないですよー!」

「お兄さんの愛情の重さで……
いっぱいもらっちゃったから……それで……」

「……?」

「とりあえず……大丈夫なのかな?」

「もう!」

「お兄さん、エツチの最中は雄弁なのに……
終わったとたん腰砕けになっちゃうんだもん……」

「……ごめんささい……」

「最中はなんだか気が強くなるというか……
本気だから……っ……」

「えへへ♪」

「そんなところも可愛くて私は好きですよっ!」

「ああ……これで俺は完全に変態あつかいだなあ……」

「あら！」

それじゃ私は、その変態に犯されてしまう
可愛そうな女神さまってことですねっ」

「おおっ……そこまで言うか……」

「えへへっ」

気落ちしてる割には……あそこはバキバキで……」

「すっ、好きな体位なんだから当然！」

「でしたら、その好きな体位で思う存分
楽しんでください！」

「私も……その立派なのが欲しくて……
うずうずしちやっつて……」

しゅ

しゅ

「後ろから突くのに興奮する変態に、
犯してくださいなんて…」

「本当の変態は女神さまの方なんじゃないかなあ〜？」

「あれえ？」

「それでお返しのつもりですかあ〜？」

「お兄さんもまだまだですなあ〜…」

「くっ…！」

「だけど俺は知ってるんだ！ぶち込んでしまえば…
この女神さまは一気によがり狂うんだって！」

「あはは！強がっちゃってえ…！」

「さあ！今ぶち込んであげるよ！
女神さまのキツキツま〇こにねっ！」

「ああ〜れえ〜犯されるう〜っ〜！」



「んんんんんんんん!!!」

「ひぐううう……」

「ほおらどうだっ！」

お気に入りのち○ぽ！ぶち込んでやったぞ！」

「はっ……はっ……」

えへへ……たっ、大したことはないですねえ……」

「何回も出したから……」

流石に今回は小さいかなあ……」

「くっ……！
口の減らない女神めっ！」

「んんん……！
今女神を征服してるのはこの俺なんだ！
好きなように楽しませてもらうさ！」

「ほらほら……！
まだまだ体力は有り余ってるからな！」

「あああああ！はあああああ！
あぐつ！……えへへ……頑張っちゃって……」

「ひあああああああ！あぐつ！あああああ……！」

「どうだ！
どうなんだ女神！」

「征服されて、
好き勝手腰を振られてるんだぞ！」

「あああああぐつ！
ひあああああ……！」

「あああ……でもやっぱり……
女神さまのま○こ……最高……！
突きたびにどんどん快感が増していく！」

「あああああああ！
私も……強がっちゃったけど……やっぱり気持ちいい！」

「もう降参するのかわ？
強がった割には…早かったな！」

「あぁっあぁはぁぁ…
からかうとすぐに本気になるお兄さんが…
あぁぁぁ…ちよっと面白くて…あっ！」

「^^^^…
俺も…おだてればすぐに乗ってくれる
女神さまが可愛くて…」

せく

「あぁぁぁぁ…！」

お互いに強がっちゃって…
あぁぁぁぁ…でも気持ちいいのは、気持ちいいもん！」

「あぁぁぁぁー！」

いつまでもいつやって女神さまと愛し合っていたいよ！」

「わっ…私もですっ！」

ぱん

「お兄さんはカッコよくて……！
エッチしてる時も愛情……たっぷりだし……！」

「近くにいると安心……あっ……できるからあ……！」

「本当に……！
本当にそう言ってくれるの？」

「あああああ！
本当ですう！お兄さんにいつまでも近くに居てほしいですう！」

「へへ……本気にしちゃうからね！
女神さまとあろう方が、嘘なんて言いませんよね！」

「はああああい！
本当に……本当に大好きですう！」



「はあ……すっかり楽しんじやったよ……
今日は本当にありがとう！女神さま！」

「えへへ♪
そう言っていたただけるなら、
私も頑張ったかいがありました！」

「……今日だけじゃなくて、
また来てくれますか？」

「そりやもちろん！」

「今日のこの一回だけなんて、
寂しすぎるよー！」

「また必ず女神さまに会いに来るからね！」

「……女神さまに……ですか……」

「えっ？」



「んあああああ女神さま！」

んんん

「あああああつああああああああ！」

んんん

んんん

んんん!!!



「あつはあ……はあ……」

「熱い……ああ……熱い……」

「また……出しちゃったよ……
遠慮なしにぶっかけちゃったよ……」

「ザーメンでいっぱいになれちゃいました……
熱いザーメンで火傷しちゃう……」

「今の君の姿……最高だよ……!」

ゴホオ...

ハァ

ハァ

「いままで見たどんなものよりも
今の君が最高に綺麗だ……」

「うふッ
そんな見え見えのおだて、
お上手ですね♪」

「そっ！そんなんじやー！」

「えへへ♪」

「冗談ですよ♪」

「だけど・・・本当にありがとうー！」

「「こちらこそですー！」」

「今までのどんなお客様よりも、お兄さんと過ごした時間が一番楽しかったですよ！」

「ハァ♡」
「ハァ♡」

「本気になるからね！」

「エッチとなったら本気にしちゃう僕だからね！」

「本気になってくださいー！」

「その度に私も本気でお相手させていただきますー！」

「何度でもー！」

「…あっ…あのや…」

「…はら」

「うすうす…考えていたというか…
思ってたんだけど…」

「…おっしやうてくださり」

「僕のこと…その…」

「…」

「…」

「正直に！」

「えっ」

「正直に言ってくれたなら、
女神さまはその者に…褒美をあげれるんですよ！」

「えっ！あっ…うん…えっと」



「僕のこと好きなのかなって…」

「好きになってくれたから
今日はこんなに良くしてくれたのかなって…」

「…お兄さんはどうなんですか？
私のこと、好きになってくれたんですか？」

「そっ、そりゃー！
こんなに可愛くて、献身的な女性なら
喜んで好きになっちゃうし！」

「いつもそばに居てくれるなら
これ以上に嬉しいことなんて…！」

「えへへ♪
やっと言ってくれましたね♪」

「えっと…」

「女神さまの格好をしているから、
表面の私だけを気に入っているなら
それは寂しいなって…」



「そうじゃなくて、私という女性を愛してくれるならそれが一番嬉しいなって……」

「女神さまを、じゃなくて、私自身を好きになって頂きたかったんです」

「……うん
とつても素敵で、一生懸命なところとか
近くに居てくれたら、どれだけ楽しいだろうって」

「僕自身そう思うよー!」

「本当ですか?」

「うん!これは僕の偽らざる本心!
僕の大事な人になってくれますか?」

「はいっ!」

「喜んで!」

「……ははは!
あははは!」



「ちよっ！
何を笑ってるんですか！」

「ごめんごめん！
何だかこの状況が可笑しすぎて！」

「自分の好きな格好をしてくれている女性が
しかもこんな淫らな状況で…
こんな話をしてるだなんて…」

「もう！
せっかくなのに！
水を差すようなこと言わないでくださいよ！」

「ごめんごめん！
でも…本来なら沢山あるハードルというか、
それら乗り越えてから行き着くはずのこの状況に
何もかもすっ飛ばしてしまったようで…
可笑しい状況だよね！」

「…えへへ
そうかもしれませんね♪
たしかにおかしいです！」

「もっといい雰囲気ではローテークしたかったのに、
台無しにしちゃったね!」

「いえ!

「こんな可笑しい状況、私も笑わずには居られないですよ!」

「そうっ…

「ははは!よかったよ!」

「お兄さんともっと仲良くなって

もっといろんなエッチ…:..したいなあ…:..」

「お望みとあれば、
どんなプレイだって…:..」

「全部受け止めてくれる?」

「えへへっ

「痛いのかは嫌ですよ?」

「最高に気持ちよくて、相性のいい同士、
痛いなんて、こっちから願って下げやあ!」



「愛の無いエッチも私は嫌ですからね！
お互いに気持ちよくなれるような…ね！」

「もちろん！後悔なんてさせないからね！」

「ああ…」

「ん？どうかした？」

「何だかこんな話をしたら体がウズウズして…」

「…僕の精液を垂れ流すその姿…
最高にエッチだね…
本当に僕のものになったって感じが…」

「ああ！

そういう関係になったからって
いきなり自分のもの宣言ですか？」

「そっ、そんなつもりじゃないけど…」



「その姿を見てたら…僕も熱く…」

「ああ…私のこの姿をオカズにしちゃうんですか？」

「最高にエロいよ！」

女神さまが精液を股間から垂れ流す姿…最高にエロい！」

「ああ…また大きく…」

「今日はもう何度も出しちゃうてるので…」

ドキ♡

ドキ♡

「僕だけの女神さま…！」

僕の精液でいっぱいにしてあげるからね！」

「女神さまを独り占めですかあ？」

女神さまを束縛して、

さらに精液、出しちゃうんですかあ？」

「ごめんね！」

女神じゃなくて、君自身を愛するなんて言った後にこんなこと…」

シクシク…

「だけど今は！
今は女神さまである君を…
君にぶっかけて！」

「はい！
この姿の私で興奮してくださらー！
今はこの姿の私を！」

「あなたの好きなようにできる
この私を見て！興奮して！ぶっかけて！」



ドキ
キキ

ム
ム

「ああ！嬉しいよ！
僕だけの女神さま！
女神さまにぶっかけるからね！」

「かけて！私にぶっかけて！
ザーメン垂れ流してる私にぶっかけて！」

「私を愛してくれる、
あなたのザーメンでいっぱいにしてえ！」

「やれやれ…お店の女の子に本気になって…
大好きだなんて言われて調子に乗ったな…」

「お店に来させて、指名してもらうのに必死なんだから
「こちらが気持ちよくなることを言うのはあたりまえだよな…」」

「あああ！大好きなんて叫んじゃうなんて！
恥ずかしくて顔から火が出るよ…」

「…ん？」

「お…お…お…お…」



「そりゃあんだだけ相手してくれたら
疲れるよな……」

「……ありがとうね……」

お店の中でのごこととは言え、楽しかったよ」

「……むにゃむにゃ……」

……お兄さん……」

「寝言か……」

「お兄さん……大好きですよお……」

「……」

「バカバカ!
本気なわけないじゃないか!」



「…僕のこと大好きなんだよね…」

「大好きな人とエッチするのは嬉しいよね…」

「寝落ち中でも…」

「むにやむにや…お兄さん大好きですう…」

「…」

「夢の中だけでなんて…悔しすぎるー!」





「んんあ…」

が

しん

「ああああ…やっぱり最高…」

「寝落ちしててもこの締め付け！」

「女神さまのアツ」最高！」





「また来ますからね！」

またゆっくりとエッチしましょうね！」

「むだやあ……はら……す……」

結局、あの後一発出してしまった…。

シャワーを浴びなおし、書置きを置いて出てきたが…。

何とも言えない至福の時間。

このようなお店があることを今更ながら驚愕している。

このようなお店を知っていて、

しかもそれを共通の話題として提供できるのであれば、
その者同士、強い連帯感を持てるのも納得できる。

先輩に心の底から感謝しつつ、
家路についたのであった。

191



次は自分が広げる番！

この世の中に自分という存在を広げるその手段として、
大いにこのお店を利用させてもらおう！

191



End.



奥付.

この度は当サークルのイラスト集
「あの子に会える噂のマッサージ屋さん vol.2」をご購入いただきありがとうございます。

前回の1作目もご好評をいただき、めでたく2作目の制作をすることができました。
今後もシリーズとして続けていければいいなと思っております。
まだまだ構図なども未熟なので、勉強勉強ですね。
3作目が完成した際は、是非ともよろしく願いいたします。

次に会うのは誰になるやら、、、

8月吉日
代表、tatsuya

制作 : Guild Plus
mail : super_sonico_saga@yahoo.co.jp
twitter : @guild_tatsuya



191

































































































































191

